



千光寺展

越中真言の古刹 芹谷山

見本



見本

越中真言の古刹 芹谷山
せん ころも せりたにせん
千光寺展

越中真言の古刹

芹谷山 千光寺の至宝

平成二十六年十一月八日(土)・十二月十四日(日)

砺波市美術館

観覧時間 午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで)
観覧料 一般500円、六十五歳以上400円、高校生以下無料
会期中、十一月十日(月)、十七日(月)をのぞき無休

〒九三九・一三八三 富山県砺波市高道一四五・一
電話〇七六三・三三一・一〇〇一

第三十八回郷土先人展

芹谷山 千光寺と法道仙人展

平成二十六年十月十日(金)・十一月三十日(日)

砺波郷土資料館

観覧時間 午前9時～午後5時
観覧無料、月曜、第三日曜休館

〒九三九・一三八二 富山県砺波市花園町一・七八
電話〇七六三・三二一・二三三九

写真展

芹谷山 千光寺の四季

平成二十六年十一月八日(土)・十二月七日(日)

となみ散居村ミュージアム

観覧時間 午前9時～午後9時(入館は午後8時30分まで)
観覧無料、水曜、第三日曜休館

〒九三九・一三六二 富山県砺波市太郎丸八〇
電話〇七六三・三四一・七一八〇

見本

砺波市合併十周年記念

県民芸術文化祭二〇一四協賛事業

主催 千光寺展実行委員会、北日本新聞社
共催 富山テレビ放送
後援 となみ衛星通信テレビ、エフエムとなみ、となみ芸術文化友の会、
NPO法人砺波土蔵の会
協賛 富山県民芸術文化祭実行委員会
写真家風間耕司（ふるさと開発研究所）

関連催し

第六回となみ散居村学習講座「真言宗の古刹―千光寺―バスツアー」

講師 石丸正運氏（砺波市美術館相談役）

日時 十一月九日（日）午後一時三〇分～五時

行程 ①となみ散居村ミュージアム一階研修室②千光寺③砺波市美術館ほか

参加料 500円（バス代ほか）

お問合せ・お申込先となみ散居村ミュージアム

☎0763-34-7180

記念講演会「千光寺秘仏本尊をめぐって―法道伝承のひろがりのなかで―」

講師 杉崎貴英氏（帝塚山大学文学部日本文化学科准教授）

日時 十一月十五日（土）午後二時～三時三〇分

会場 砺波市美術館二階市民アトリエ

聴講無料

報告会「千光寺仁王像の修復について」

講師 川口圭太氏（園城寺（三井寺）佛教尊像修復院仏師）

日時 十二月六日（土）午後二時～三時三〇分

会場 砺波市美術館二階市民アトリエ

聴講無料

ギャラリートーク

講師 尾田武雄氏（砺波市文化財保護審議会委員）

日時 十二月十三日（土）午後二時～三時

会場 砺波市美術館一階企画展示室

参加費無料（要観覧券）

見本

千光寺展実行委員会

委員長 尾田 武雄
砺波市文化財保護審議会委員

委員 名越 仁功
千光寺奉賛会会長
千光寺の文化財を守る会会長

委員 安念 道雄
芹谷山千光寺第七十六世住職

委員 高原 徹
砺波郷土資料館館長

委員 白江 秋広
となみ散居村ミュージアム館長

委員 小野田裕司
砺波市美術館館長

見本



千光寺地藏堂
中央に延命地藏が安置され、お堂は総檜造りで各所に獅子やバクの木鼻など見事な彫刻が施されている。

Photo. © Koji Kazama

本展は、砺波市合併一〇周年記念事業として、砺波市の公共施設である砺波市美術館、砺波郷土資料館、となみ散居村ミュージアムの三館が連携して開催するものです。

三館連携展は、これまで二〇一〇年の企画展示「砺波の真宗風土」展があり、今回が二回目となります。飛鳥時代に開基し、この地に一三〇〇年の寺史をもつ高野山真言宗 芹谷山千光寺の文化財・密教美術品を中心に紹介する展示です。千光寺は古代には皇室の勅願所とされたといわれ、昭和四十四年に県民公園頼成の森で開催された、第二〇回全国植樹祭の折には、昭和天皇皇后両陛下がお立ち寄りになられた大変由緒あるお寺です。本尊である銅造観世音菩薩立像、絹本着色大威徳明王図や絹本着色両界曼荼羅図はじめ、観音堂、御幸門、山門、書院、土蔵といった県や市の指定文化財も多く、県内有数の文化財を誇る古刹であります。

この寺のたたずまいそのものから感受される癒しの趣は、この寺を訪れた人誰もが抱かれるのではないでしょう。

各館の研究蓄積を集約して、文化財、美術、学術、考古、歴史など様々な角度からの検討が反映された図録を多くの方に手にとっていただき、身近にある砺波市の文化財への認識を深めていただければと思います。

終わりに、貴重な文化財をお貸しくださいました千光寺様はじめ、ご支援ご協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成二十六年十一月

砺波市長 夏野 修



Photo. © Koji Kazama

千光寺山門
寛政九年（一七九七）第六世行遍ぎょうへんの代に井波大工柴田清右衛門によって建立。砺波市指定文化財。

千光寺展の至宝の公開を祝して

千光寺展実行委員長 尾田 武雄

見本

越中真言の古刹芹谷山千光寺の至宝が、砺波市美術館に一堂に会し市民に開放されましたことは大変有意義で素晴らしいことと思います。砺波市には仏教系寺院が現在八九ヶ寺あります。その内真宗寺院が六七ヶ寺もあり、真宗王国であります。そんな中にある真言宗寺院が四ヶ寺ありますが、その中で特に古い伝承と寺宝を保持されるのが千光寺であります。

寺伝によりますと、当寺は大宝三年（七〇三）天竺（インド）の僧法道上人が開いたとされています。砺波地方では、南砺市の安居寺とともに最も古いお寺であります。法道上人は金剛摩尼の術を体した仙人で、中国を経て来日され播磨国で多くの寺院を開かれています。諸方を遍歴され越中国般若野の東方の深山で、上人はご休憩されましたが、笈を担ごうとすると鉄山のように重くなり、瀧のたもとに不動尊が現れ谷一杯に金の蓮が生え、この地が結縁の仏地とされ、観音様をまつるお寺を開かれたとされています。その観音様が富山県指定文化財の銅造観世音菩薩立像であります。また上人が芹を常食されたことにより山号を「芹谷山」とされました。

この他県指定文化財は、絹本着色大威徳明王図と絹本着色両界曼荼羅図があり、砺波市指定文化財では五点、砺波市ふるさと文化財一点の建造物等があります。指定文化財以外にもそれらに匹敵するものも多々あります。それらが今回、千光寺住職様、千光寺の文化財を守る会様、檀家の皆さま等々の絶大な御協力で公開されましたことは、誠にうれしいことであります。市民の皆様にとりましても、地域の文化的財産を知り理解し誇りを持てる「越中真言の古刹 芹谷山千光寺展」となりますよう祈念しています。



千光寺観音堂

井波大工の名工 松井角平の手になる、優美な曲線美を描いた建築。砺波市指定文化財。

Photo. © Koji Kazama



千光寺展によせて

千光寺住職 安念 道雄

芹谷山千光寺は大宝三年（七〇三年）に天竺（インド）僧の法道上人が持参された御本尊である聖観世音菩薩像を奉り開かれたと伝えられております。以来、千三百十余年、三論宗さんろんから真言宗への改宗や三度の火災など様々な事例を経て現在まで仏の教えの灯を絶えることなく照らし続けております。

今回の展示にお貸出いたしました仏像、仏画、仏具は本尊である観世音菩薩の廻りをお飾りしおもてなしする為、または、法要の際に本尊として拝む為に長い歴史の中で先人が少しずつ揃えてこられたものであります。

現在において仏像などが評価されるのは単純に美術品としての意味合いが多いように感じます。仏様はお誓いや願いがお姿やお名前に表れておいでで、曼荼羅に見られるように多種多様なお姿をしておいでです。これは勝手にお姿を描いてよい訳ではなく、造形や体勢、指の形のちよつとした違いにも意味があり、当時の仏師の方々もその教えに沿ってお姿を造られました。そして私達僧侶はその多様な仏様のお姿より現れ出る様々なお心を学ぶ事を日頃の修行としているのです。

この展示をご覧になった皆様方には美術としてだけではない多様性を包容する仏教の寛大さ、また、それを学ぼうと努力してこられた偉大な先人の歴史と文化の息遣いを肌で感じとっていただければ幸いです。

最後に今回の展示におきまして非常に早い時期より丁寧に熱心に文化としての展示に拘り準備を進められた関係の方々に感謝の意を表します。



Photo. © Koji Kazama

千光寺土蔵

和洋折衷の斬新な意匠と大胆な鍍絵^{こて}が特徴である。鍍絵は壁職人竹内源造の作と云われている。砺波市指定文化財。

「千光寺の至宝」企画展について

千光寺奉賛会 千光寺の文化財を守る会 会長 名越 仁功

このたび、砺波市美術館・砺波郷土資料館・となみ散居村ミュージアムの共同で、「千光寺の至宝」展が開催されることになり、公開される寺宝の解説図録も発刊されることになりましたことは、千光寺の檀家や、千光寺の文化財を守る会にとりまして、たいへん嬉しく欣快とするところであります。

大宝三年（七〇三年）に、天竺の僧法道上人によって開基されたと伝えられています千光寺は、爾後一三〇〇余年にわたり数々の経緯を重ねながらも、法灯を絶やすことなく、今日に伝えております真言宗の古刹であります。

この間、幾多の戦乱・災害により、仏閣やあまたの貴重な資料の喪失もありましたが、その都度、寺院・檀信徒のあつい帰依心により、復興・再建・整備してまいりました。だからこそ、多くの寺宝も、今日に伝えられてきているのであります。

今、この展示を開催出来ますのも、これら先人の努力の賜物であると、感謝せねばなりませんし、また私たちとしては、後世に立派に伝えてゆく責任もあると思います。それだけに今回の企画展が、千光寺の文化財の大切さの理解に、役立っていただけたらと、強い期待をいだいております。

さらに、日本中どこに行ってもお寺があります。都会の真ん中にもお寺がありますし、辺鄙な田舎でもお寺に出会えます。歩けば道端には地蔵さんがまつられていますし、あちらこちらに観音様の御堂がたくさんあります。またすばらしい仏像もたくさんあります。このことは日本では昔から、たくさんの人々が、仏教を信仰し崇めてきたからに違いありません。仏像や寺宝は、日本人にとって語らずとも琴線に触れることの出来る、心の共通語のようなものだと思います。ですから、今回の企画展も、宗派を問わず、ひろく仏教に近づく一助にもなれば、更に幸いと存じます。

今回の至宝展に、大切な宝物を展示していただきました千光寺様と、企画・準備・施行されました方々に、厚くお礼を申し上げ、成功を祈念いたします。

目次

ごあいさつ

千光寺の至宝展の公開を祝して

千光寺展によせて

千光寺の至宝企画展について

千光寺の建築について

千光寺の寺宝

千光寺秘仏本尊について

千光寺の絵画

両界曼荼羅の構成と真言宗用語解説
千光寺の彫刻

コラム 千光寺仁王像の謎―修復を手がける仏師を訪ねて―

砺波市長 夏野 修 5

千光寺展実行委員長 尾田武雄 7

千光寺第七十六代住職 安念道雄 9

千光寺奉賛会・千光寺の文化財を守る会会長 名越仁功 11

職藝学院教授 上野幸夫 14

砺波市文化財保護審議会委員 尾田武雄 16

千光寺地藏堂(4)、千光寺山門(6)、千光寺観音堂(8)、千光寺土蔵(10)

絹本着色大威徳明王図(17)、絹本着色両界曼荼羅図(18・19)、銅造聖観世音菩薩立像(20)

撮影・ふるさと開発研究所 風間耕司

帝塚山大学文学部日本文化学科准教授 杉崎貴英 21

砺波市美術館学芸員 末永忠宏 24

弘法大師像(25)、真言八祖像(26)、

高野四社明神像(27)、金剛界大日如来坐像(28)、

不動明王坐像(29)、五大明王像(30)、波切不動明王立像(31)、

鉄塔愛染明王像(32)、三宝大荒神像(33)、

釈迦三尊像(34)、釈迦十六善神像(35)、薬師三尊像(36)

阿弥陀三尊来迎図(37)、十二天像(38・39)、仏涅槃図(40)、地獄図(41)、

両界曼荼羅図(42・43)、敷曼荼羅図(44・45)、

千光寺・観音の光(72)、三千仏名(73)

砺波市美術館学芸員 長田里恵 46

となみ散居村ミュージアム館長 白江秋広 48

愛染明王坐像(49)、増長天立像・多聞天立像(50)、

閻魔王坐像(51)、石造弘法大師坐像(72)、

五智如来像(74)、観世音菩薩立像(前立観音)(75)、賓頭盧尊者(77)

砺波市教育委員会生涯学習・スポーツ課主任 野原大輔 52

見本

芹谷山千光寺と法道仙人

千光寺の書跡・秀吉禁制・前田利長公消息

千光寺の古書・概要と特徴

千光寺の法具

千光寺の伽藍配置図

シヨウジヨウバカマと千光寺さん

千光寺の四季

癒しと観光、開かれた学習の場

千光寺展ワーキンググループの経過報告にかえて

出品目録

関連年表、歴代住職

レポート 千光寺の方位の研究

レポート 千光寺旧伽藍における地中レーダー探査

凡例

※本書は、砺波郷土資料館、とんみ散居村ミュージアム、砺波市美術館の三館共同企画「千光寺展」のカタログとして出版された。

ただし、同展の出品作と本書の掲載図版の間には若干の異同があり、また本書に記述されている作品が、必ずしも展覧会に出品されているわけではない。

※図版には、分野・番号・文化財指定・作品名・制作年・材質形状・員数・寸法・センチメートルを付した。

※図版解説は千光寺展ワーキンググループが担当し、末尾にイニシャルを付した。

砺波郷土資料館主任学芸員 安カ川恵子 54

法道上人倚像(55)、千光寺縁起(56)、史料年代別由緒書による千光寺の開基(57)

砺波市教育委員会生涯学習・スポーツ課主任 野原大輔 58

氷見市立図書館・氷見市史資料整理室 森越 博 60

法華三大部私記・禅客鸞徒破会評決・地藏菩薩応驗新記(62)、

芹溪山般若台書籍目録(63)、大般若経 六百卷(63)

砺波市美術館学芸員 末永忠宏 63

大壇具・四面器(76)、華鬘・華籠(77)

イラストレーター 吉水友香 64

砺波市美術館館長 小野田裕司 65

フォトクラブとんみ野 66

砺波市文化財保護審議会委員 尾田武雄 70

砺波市美術館学芸員 末永忠宏 78

砺波市美術館学芸員 末永忠宏 80

砺波市美術館学芸員 末永忠宏 81

酒井英男・泉 吉紀・野原大輔・中埜貴元 84

泉 吉紀・鈴木 碧・酒井英男・野原大輔 87

表紙写真
安念余志子「とんみ野古寺愛歌」(二〇〇八)より
《落照》表1、表4
《昔も今も》表2
《刻の流れ》表3
すべて千光寺にて撮影

※レイアウトは末永忠宏(砺波市美術館学芸員)が担当した。

NrMtOyNd S W Y T MkOt
小野田裕司 (砺波市美術館館長)
末永 忠宏 (砺波市美術館学芸員)
長田 里恵 (砺波市美術館学芸員)
野原 大輔 (砺波市教育委員会生涯学習・スポーツ課主任)
白江 秋広 (とんみ散居村ミュージアム館長)
渡辺 礼子 (砺波郷土資料館学芸員)
安カ川恵子 (砺波郷土資料館主任学芸員)
高原 徹 (砺波郷土資料館館長)
松田 憲 (NPO法人砺波土蔵の会理事)
尾田 武雄 (砺波市文化財保護審議会委員)
尾田 憲 (NPO法人砺波土蔵の会理事)

千光寺の建築について

職藝学院教授 上野 幸夫

千光寺は砺波市の東南部、庄川右岸の芹谷野段丘の東、溪流和田川の対岸に位置する真言密教の古刹である。現在の伽藍は江戸中期から明治にかけて再興されたものだが、それぞれの建物は時代の特徴と優れた意匠や技術を有しており、大変見ごたえがある。

それでは境内の入口となる国道三五九号線に接した六地藏から順次見て行く事とする。

・地藏堂は切妻造りの平入りで玉石積の基壇上に建ち、製作年代の違う面長や丸顔の地藏が六体祀られている。建物は間口一間半の奥行四尺程と六地藏を祀るため横長になり、正面を開放、両側面は格子窓、背面は板壁とする。屋根は棧瓦葺で恵比寿と大黒の鬼瓦になるが、瓦下には当初のこけら葺が残り、今以上に落ちついた堂であった事がわかる。

・六地藏に接して参道沿いに石造の三十三ヶ所観音像が連続して並び、立ったり座ったり、立て膝を立てたりと、その姿と顔の表情も様々で、心が和みつい合掌したくなってしまう。

・うつそうとした杉木立の中をさらに進むと一際見事な祠が姿を現す。建物は方一間ほどの祠だが本格的な総檜造の仏堂で、最上部の石を迫り出して蓮の花状に見せた玉石積の基壇上に建っており、堂の中には大きな御影石の地藏が祀られている。柱間は正面に棧唐戸を開き、両側面は花狭間の窓、背面は一枚板の板壁とし、軒下の組物は出三斗の詰組で、軒は出の深い二軒になる。建物各所には「獅子」や「獏」の木鼻や「牡丹唐草」や「瑞鳥」など見事な彫刻が施されている。屋根は入母屋造の平入で軒唐破風を付け銅板葺になる

が、当初はやはりこけら葺と考えられる。この地藏堂は規模、意匠、技術すべてに於いて県内屈指の優品と言える。

・地藏堂を過ぎて左手の石段を登ると三〇m程のゆるやかな勾配の参道になり、正面に山門二階の屋根だけが見え、進むにつれてだんだんと姿を現す。道の両脇は背丈ほどの高さの石垣積みで、反りを付けた美しいハ積みになり、裾の溝まで自然石としている。

・山門の手前右手には「不許葦酒入山門」と書かれた戒壇石が立ち、門は堂々とした総檜造りの三間一戸の二階二重門形式で、屋根は北陸では数少ない重厚な本瓦葺になる。一階の左右に阿吽の金剛力士像、二階には釈迦三尊を中央に周囲に十六羅漢が祀られており、棟札から寛政九年（一七九七）の建立で棟梁は柴田清右衛門藤原貞国である事が判る。建物は二階組物が三手先詰組で軒を扇垂木とした本格的な禅宗様を主体としながらも、一階に墓股や間斗束、二階に連子窓など和様も用い、頭貫を虹梁形とし、組物の尾垂木に彫刻渦を配すなど、装飾性に富んだ完全な幕末の意匠に移行する過渡期を示している。この形式の門は県内では他に瑞龍寺、瑞泉寺、善徳寺があり、現存するものでは当寺が最古で江戸時代後期の代表的遺構と言える。

・山門を入ると奥には四mほどの高さで二重基壇状になった美しいハ積みの石垣が積みまれ、その周囲には濠が巡らされている。中央の石段を登ると正面に観音堂があり、右手には朱塗りの鳥居を介して奥に稲荷社が祀られている。

・観音堂は梁間五間桁行五間の大きな建物で、中に祀られている白鳳期の特徴を示す本尊の観世音菩薩像と共に千光寺を代表する建築と

言える。観音堂は宝暦十年（一七六〇）に間口三間の小堂で建立されたが、文政二年（一八一九）に規模を拡大した現在の観音堂が二代目松井角平恒徳を棟梁に再建された。その後、文政七年（一八二四）に内陣の須弥壇を三代目松井角平恒久が、慶応二年（一八一九）に屋根形状を四代目松井角平恒廣により改築され現在の姿になっている。建物は観音堂らしく入母屋造り妻入りの正面に唐破風の向拝を付けた形式だが、奥の内陣部には入母屋造り平入りの屋根を重ね、裳階を付けた重層の屋根とした複雑で変化に富んだ特異な屋根になる。建具も棧唐戸や蔀戸及び連子窓など意匠的で、向拝には迫力ある龍の欄間や竹に虎の彫刻が施され、室内の欄間には様々な姿の見事な唐獅子彫刻になる。

・山門への参道と平行してもう一本庫裏への道があり御幸門が建つ。この門は高岡の瑞龍寺から明治五年（一八七二）に移築されたもので、寛文中（一六六一〜一六七二）に造られた一間薬医門である。本柱は小平で正面を幅広く見せ、全体的に古式でおおらかな独特の木割りになる。扉も古式な腰板張りの格子扉で偏平な饅頭金具や先端の開きが少ない八双金具も古い様式を残す。また、緩やかに反り増しを付けた垂木や軒反りには落ちついた風格があり、小舎で簡素ながら良匠の冴えが感じられる。尚、屋根は現在棧瓦葺だが当初は緩やかな反りと両端部に箕甲の付いた美しく軽やかなこけら葺である。一間薬医門形式では、北陸三県で最も古いものに位置づけられ価値が高い。

・門を入ると手前に庫裡、奥に宝暦元年（一七五一）に再建された本堂が建ち、庫裡の裏側には中庭を中央に新座敷と土蔵が建てられている。

・新座敷は設計図書から明治二十九年（一八九六）の建立で棟梁は砺波市太田の名工藤井助之丞である。建物は数寄屋風書院造りで、七畳半の入口の間、八畳の次の間と御座敷、御座敷に接して庭からの玄関と水屋を兼ねた鞘の間、そして三畳の茶室から成る。洗練された意匠で多種多様な銘木を用い、木部には鏡のように輝く漆が塗られ、壁は朱塗りの壁で床の間だけを鉄砂の色壁としている。銀製の釘隠金具や七宝焼や急須形の襖の引手金具なども見るべきものがある。普請関係帳によれば大工は何と延べ三、三三一人を要しており、材料や手間を惜しまず建てられた明治期を代表する上質の和風建築と言える。

・土蔵は梁間二間半、桁行三間の西蔵と、梁間二間半、桁行四間の東蔵をあいだ半間空けて並立して一棟とし、正面に一間幅の下屋を付けた二戸前形式になる。西蔵は棟札により天明五年（一七八五）で、東蔵は文久二年（一八六二）の建築だが、普請関係帳から明治四十二年（一九〇九）に藤井助之丞を棟梁に二棟を一連の置き屋根を乗せて一棟にして戸前を付け、小杉の名工竹内左官により壁を塗り直して鍍絵と呼ばれる漆喰彫刻を施して現在の姿に改修した事がわかる。土蔵の正面腰廻りには黒漆喰で縁取りされた壁面いっぱい、様々な姿の九羽の「鶴」がほぼ原寸大で漆喰彫刻され彩色されており、また、扉には「恵比寿」と「大黒」や「波に亀」、二階の唐破風窓には「松に鷹」や「波に龍」など縁起のよい伝統的な漆喰彫刻が配され、鉢巻や隅角および窓枠には黒漆喰を巧みに扱い「家紋」や洋風の「柱型」とするなど洋風意匠も取り入れている。左官技術の最も花開いた時代の県下を代表する傑作と言える。

千光寺の寺宝

砺波市文化財保護審議会委員 尾田 武雄

大宝三年（七〇三）に開かれた越中真言の古刹芹谷山千光寺は、天竺（インド）の僧法道上人を開基とし千三百余年にわたり、営々と法灯を護られてきた。県指定文化財には、白鳳期作の銅造観世音菩薩立像があり、躍動感に溢れる絵画様式で南北朝末期から室町初期の作と推定される絹本着色大威徳明王図、構成や諸仏の形姿が儀軌に忠実で、鎌倉期作とされる絹本着色両界曼荼羅図の三点がある。

建造物の山門、観音堂、新座敷（書院）、土蔵、御幸門の五件は市指定文化財である。他に地蔵堂、閻魔堂、回廊、本堂等の建造物もそれに匹敵するものである。職藝学院の上野幸夫教授によれば、その当時最高の職人と最良の部材で、手間暇をかけて造り上げられた、素晴らしい誇り得る千光寺であると称賛されている。この言葉は建築物によらず、総ての寺宝に当てはまる。県指定文化財三点もこの地方を代表する仏教美術の優品である。また今回、展示を許された絵画、彫刻、法具、書跡、古書などその時代を代表するものであり、真言密教美術の奥深さを感じることが出来る。

真言宗には十八派あるとされ、芹谷山千光寺は高野山真言宗に属されている。高野山真言宗は、高野山奥之院・弘法大師御廟を信仰の源泉とし、壇上伽藍を修学の間所として、真言密教の教えと伝統を今日に伝えている。今回は弘法大師への篤い信仰と、大事に伝えられたものを当美術館にお招きしたものである。



Photo. © Koji Kazama

絹本着色大威徳明王図

室町時代（富山県指定文化財）

絹本着色 一幅

縦一二六・五 横六七・五

大威徳明王は五大明王のひとつ。五大明王とは不動明王を中心として四方に降三世明王（東）、軍荼利明王（南）、大威徳明王（西）、金剛夜叉明王（北）の各明王を配する。大威徳明王は阿弥陀如来の教令輪身で、一般的には火焰を負い六面六臂六足の忿怒相で水牛にまたがるが、本図では疾駆する水牛の背に立つ躍動的な姿をしていて珍しい。

三鈷杵、輪宝をかざし、四隅に獅子、虎、馬に乗った四人の眷属をしたがえ、弓戦を挑む図柄で主尊眷属とも黒雲に乗って飛行している。躍動感に溢れる絵画様式と目の粗い室町絹に描かれている点から、南北朝末期から室町初期の作と推定される。（Nd）

見本



Photo. © Koji Kazama

絹本着色両界曼荼羅図

鎌倉時代（富山県指定文化財）

絹本着色 二幅対

（各）縦八八・五 横七三・五

両界曼荼羅は、大日経、金剛経の両部大経が説く密教の最高理念を、大日如来を中心にあまたの諸尊を画像化することによって絵画的に表現したものである。その構成は慈悲の面から開示する胎藏界と智徳の面から説く金剛界から成っている。

この曼荼羅図は、構成や諸仏の姿形が儀軌に忠実で、諸尊の輪郭を黒線で描き、白群青、朱群青、胡粉、緑青、黄土などの岩絵具などで濃く彩られ、小仏像も丁寧に描かれており、技法もすぐれている。

本図は各々幅の狭い二枚の絹布（室町以前の絹）を継ぎ合わせて描かれている。後年の補筆もなく県内で最も古い鎌倉末期制作の両界曼荼羅として、昭和五十六年に富山県指定文化財となっている。（Nd）

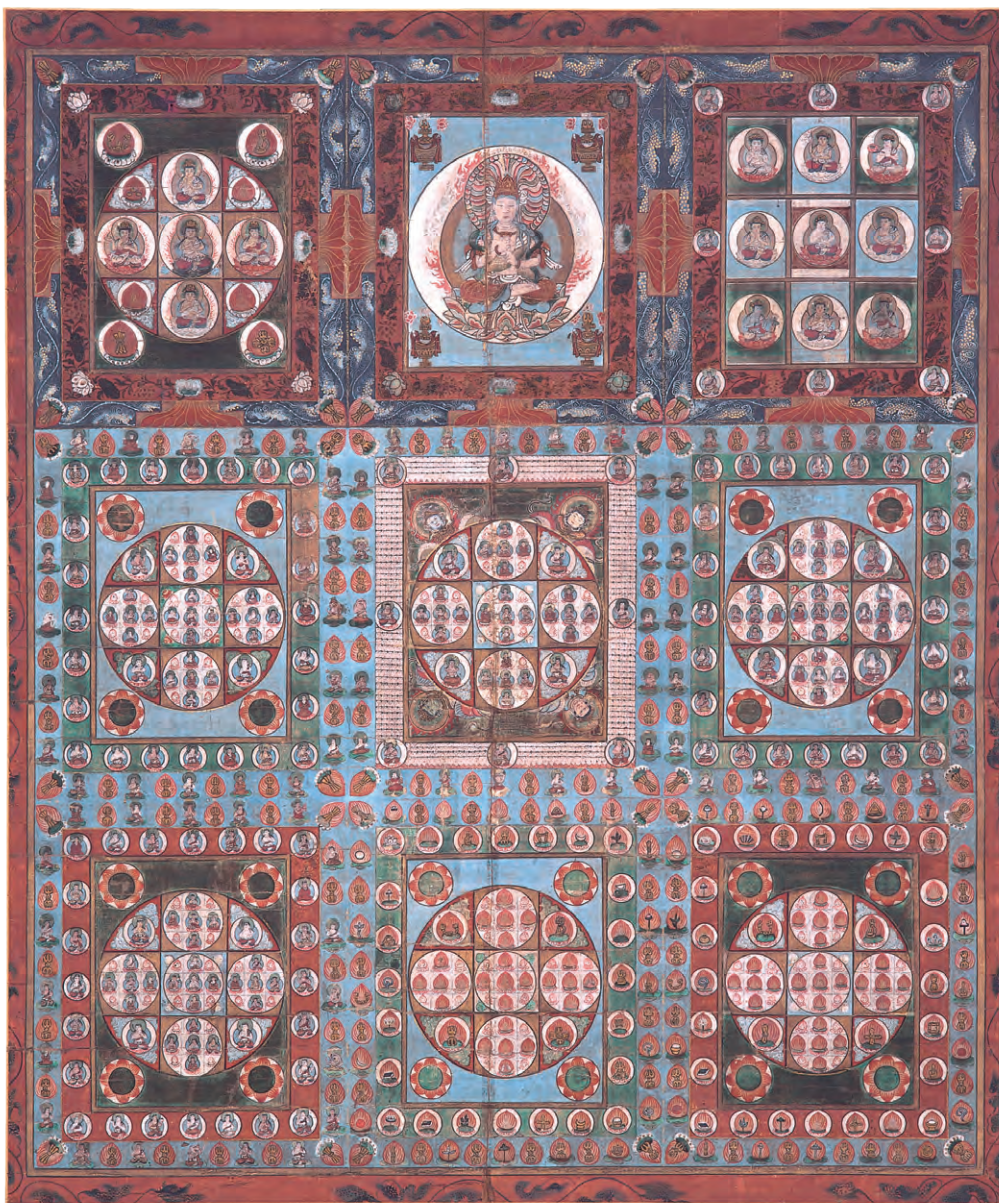


Photo. © Koji Kazama



Photo. © Koji Kazama

銅造観世音菩薩立像

飛鳥時代

銅造

像高 三三・二

総高 三九・〇

千光寺本尊。三十三年に一度ご開帳される秘仏。富山県指定文化財。



千光寺秘仏本尊について

帝塚山大学文学部日本文化学科 准教授 杉崎 貴英

富山県下には、都から離れた地には珍しく、奈良時代以前にさかのぼりうる金銅仏が四体も伝わってきた。富山市（旧婦中町）の玉泉寺観音菩薩立像（富山市指定文化財）と本覚寺観音菩薩立像（重要美術品）、県外の個人が所蔵する伝氷見市出土の如来立像（重要美術品）、そしてここ千光寺の秘仏本尊、銅造観世音菩薩立像（富山県指定文化財）である。

総高（台座底面から宝冠の頂部までの高さ）は三九・〇センチ。蓮華座を含めて全体を一度に鑄造しており、内部は胸辺りの高さまで空洞で、その頂部中央には鉄心が残存する。表面のところどころに鍍金（金メッキ）が残り、制作当初の輝きをかすかに伝えているが、傷みが手当てされた部分も少なくない。宝冠の正面上部、左腕の肘から先、右腕は前膊の半ばから先は当初のものが失われ、両腕から台座に垂れ下がる天衣（シヨール）^{てんね}ともども木で作り直されている。正面では腰の下あたりにも修復の手が加わっている（以上の後補箇所には、銅の部分に合わせた褐色が塗られている）。ほがらかな童子の姿を思わせる本尊だが、子細に見ればなかなかに痛ましい。

『千光寺本尊神験記』は、この秘仏が「勝金鑄像」「真金尊像」（金無垢でできた仏像）と信じられていたこと、それ故に三度も盗まれたことを伝えている。三度目には鉄槌で打たれたというが、よく見れば正面腰下あたりの天衣に三つ、短い筋状の傷があるのにも気づかされる。何度も盗難に遭いながら、そのたびに「神験」を發して

は寺に戻ってきた仏像——この秘仏は、そうした靈験の伝承とともに大切にされてきた。痛ましい損傷と修復は、千光寺本尊の信仰の歴史を物語る痕跡でもあるのだ。

このくらいの大きさの金銅仏は、日本では飛鳥から奈良時代にかけて数多くつくられた。頭部が大きく寸胴のプロポーションも、古代の小金銅仏にはよくみられる。とくに類似する像は他にはわかに思い浮かばないが、つぶさにうかがえば、いわゆる白鳳期（七世紀後半～八世紀初頭）の作例との脈絡が見えてくる。

宝冠の正面と両側面に飾りを着ける三面頭飾は、白鳳期に多くみられる。ただし正面の飾りが山形をなし、その両端が側面の飾りに接続するほど幅が広い点は一般的ではなく、より古い要素ともいえる。両側面の飾りが鳥の翼のような形をなす点は白鳳期にしばしば見られるものの、それらは小さく耳の上に付くのに対して、千光寺本尊では耳の外側全体を縁どるように大きくあらわされており違いが目だつ。耳は大きく、すぐには耳とは判別できないほど抽象的な形をしている。頭上に髻（もんどり）^{もとどり}を結び、両耳の後ろから垂らす髪は、両肩の上で幾筋かに分かれ、肩の丸みに沿って広がる。これも白鳳期に散見されるものの、たとえば六九二年に出雲の豪族がつくらせた島根鰐淵寺の観音菩薩立像に比べても、その表現は素朴に映る。また胸飾（首飾り）^{きようしやく}のデザインは、古代小金銅仏のなかでも簡素な部類に属する。大阪観心寺の菩薩半跏像などと基本的な構成は

見本

共通するものの、ずっと大ぶりに造形され、背面ではゆったりとたわんであらわされている。裾（巻スカート）の上部には二筋の紐状のものをあらわし、その背面中央からは、先端に水滴状の玉飾りが付いた瓔珞（ようらく）が長く垂れる。これも白鳳仏の背面にときどき見られるのだが、それらは二本が普通である。

以上のような特色は、飛鳥・白鳳期の作品にならいつつ、少し下の時期に地方で造られたことを示しているのではないか。石丸正運氏（元砺波市美術館館長）が新聞取材に答えて「ふつくらとしたほかが少年のように初々しく、白鳳時代の雰囲気をもたえながらも、がっしりとした肩の盛り上がりからは次の（奈良）時代への流れが感じられます」と説かれたように、八世紀になってからの制作とみるのがふさわしく思われてくるのである。

しかしまた、かつてこんな見方もなされたことがある。千光寺本尊は、日本海沿岸に点在する「渡来仏」の一つで、「渡来人ないしその子孫たちがこの地で制作したと考えられる」のではないか——。古代小金銅仏に詳しい久野健氏（たけし）が、第三回「日本海文化を考える富山シンポジウム」（一九八四年）の席上、会場からの質問に答えてコメントしたものだ。その後この見解は深められていないようだが、「渡来仏」という視点からおのずと想起されるのは、千光寺で語られてきた本尊の由来である。

享保十一年（一七二六）の『越之中州般若野芹谷山千光寺縁起』は、天竺から閻浮檀金の観音像を携えて日本に飛来した法道仙人がこの寺を開創したと綴っている。この人物は実在が確かめられず、平安末期に法華山一乗寺（兵庫県加西市）あたりで創出されたと考えられており、播磨周辺には開基に仰ぐ寺院が多い。そして法道伝承密

集地域から遠く離れた北陸に、千光寺のほか能登の石動山や氷見の大栄寺、小矢部の観音寺に開基伝承がみられるのである。ただし貞享二年（一六八五）に加賀藩に提出された由緒書上には、「大宝三年唐僧円徳上人之建立」と記され、「縁起・由来」などは「先年乱世之（みぎり）に失われたと記されている。これ以降、『元亨釈書』（一二三二年）収録の法道伝や石動山の縁起を参照しつつ編みなされたのが、法道仙人が登場する千光寺縁起であるらしい。その文中では「仙人あるいは円徳上人と称し」として整合性ははかられている。

こうした由緒の内容を、虚構として片づけるのは簡単かもしれない。しかし法道伝承の源である一乗寺本堂に、白鳳期／奈良時代の個性豊かな金銅仏七軀が安置されてきたことは無視できない。後藤道雄氏が千光寺本尊を含めて注目したように、異風ある古代の小金銅仏が、伝説的な僧侶の開基伝承とともに伝わっている例が各地にみられるのである。一乗寺でも、そして千光寺でも、古代の小金銅仏を奉じた遠来の山林修行者が実在し、その記憶が霞んでいった後代に至って、天竺の法道仙人あるいは唐僧円徳上人といった名のもとに、寺の開創者として語り直されたのではないかと考えてみたくなるのである。

ところで、「千光寺」という名の寺院は日本各地にいくつもあり、そのほとんどは変化観音のひとつ千手観音（千手千眼観音）を本尊としている。千手観音に関する経典の一つ『千光眼観自在菩薩秘密法経』にもとづく寺号だろう。富山県内には魚津市にも千光寺があつて、その本尊も銅造千手観音立像（県指定文化財、鎌倉時代）である。ここ砺波の千光寺本尊は千手ではなく基本的な姿（聖観音）だから、ひとまず例外とみることが可能ではある。ただ気にかかるの

は、右にあげた經典との関連をより強く感じさせる「千光眼寺」という寺号も使われていたことである。六十四世の行遍師が、寛政四年（一七九二）の『般若台書籍目録』の表紙、同十一年の「岩黒の不吹堂」（市指定文化財）の銘文で明記しているのだ。

この謎を解くヒントは、法道伝承のひろがりのなかから得られそうである。その起点にあたる一乗寺の本尊は、実際には千光寺の秘仏と同じく二臂の銅造観音菩薩立像だが、千光寺縁起に影響を与えた『元亨釈書』には「千手大悲銅像」とあり、さかのぼって平安末期の文献にも千手観音だと記されているのだ。ここには恐らく秘仏という事情が関係していよう。また、一乗寺と同じ西国観音霊場の一つ三室戸寺（宇治市）の本尊は、飛鳥時代に遡るかともされる二臂の銅造観音菩薩立像だが、これも早くから秘仏で、現在に至るまで千手観音として信仰されてきた。興味深いことに、三室戸寺の開基を「宝道聖人」つまり法道仙人と記す平安末期の文献もある。

あるいは千光寺本尊も、かつて秘仏とされた上で千手観音として信仰された時期があり、その名残が千光寺（千光眼寺）という寺号なのかもしれない。縁起に織りなされた法道伝承は、一乗寺や三室戸寺の例を顧みる時、やはり似つかわしく感じられてくるのである。

【参考文献】

- ・田邊三郎助・松原三郎『小金銅仏―飛鳥から鎌倉まで―』（東京美術、一九七九年）
- ・後藤道雄「鹿島・神向寺の金銅仏」（『仏教芸術』第一五一号、一九八三年）
- ・森浩一編『東アジアと日本海文化』（小学館、一九八四年）
- ・中前正志「法道仙人の進出」（『説話論集』第五卷、清文堂出版、一九九六年）
- ・石川知彦「総論 加西の古代彫刻」（『加西市史』第四卷、二〇〇三年）
- ・「千光寺（砺波）の観世音菩薩立像」（『北日本新聞』二〇〇四年五月十二日朝刊）

千光寺の絵画

砺波市美術館学芸員 末永 忠宏

千光寺には、真言宗寺院として仏画類の寺宝が多く遺されている。

先ず富山県指定文化財の絹本着色両界曼荼羅図である。縦八十八・五センチ、横七十三・五センチ。制作は鎌倉時代で胎藏界曼荼羅図、金剛界曼荼羅図の対幅である。弘法大師空海が中国で真言七祖・恵果から伝授された現図曼荼羅の図様を小形化して継承したもので、補筆も少なく彩色もよく残っている。

同じく県指定となっている絹本着色大威徳明王図（大威徳転法輪曼荼羅図）も注目されてよい。こちらは室町初期の制作とされ、少し形式化が見られるものの、雲上で前方の輪宝を目指し、弓矢を構えて疾駆する大威徳明王には十分な躍動感がある。明王には四人の童子がそれぞれ弓矢を構え、馬、獅子、牛の背中に立って従っている。真言六祖一行訳の「秘術如意法」の曼荼羅法の所説を絵画化したものとされる。密教絵画として珍しい図像である。

ほかに弘法大師像、真言八祖像、高野四社明神像、五大明王像、波切不動明王立像、十二天像、江戸期になると思われる大型の両界曼荼羅図、敷曼荼羅図など、灌頂に必要な画像が揃っていることも注目されてよい。それ以外にも、大涅槃図、三千仏名、地獄図などがある。古来より寄進されたものであろうか。

平成十八（二〇〇六）年に前田常作による清澄なマンダラ版画が同寺より頒布されたことも記憶にあたりたい。

見本



弘法大師像

室町時代

絹本着色 一幅

縦七九・〇 横四〇・〇

右手に五鈷杵を逆手で執り、左手に念珠を持ち、背もたれのある椅子型の床座に座す。床座の前には木履、脇に水瓶を置く。見開いた大きな目や通った鼻筋、端正に引き結ばれた口などに弘法大師空海の意志の強さが見て取れる。

このような像容は真如親王様と呼ばれる。これは、空海の入定に際し、高弟の実恵の願いにより、真如親王（平城天皇の皇子）が描き、高野山御影堂に安置したという伝承のある画像の系譜である。（Y）

弘法大師 空海

空海は宝亀五年（七七四）讃岐生まれ。初め大学で学んだが、のちに仏門に入り四国で修行し、延暦三年（八〇四）遣唐使とともに唐へ渡り、大同元年（八〇六）に帰国した。わずか二年という短期留学ではあったが、その間最新の中国文化を学び、師である恵果阿闍梨から金剛・胎藏界両部を授けられての帰国であった。帰国後は嵯峨天皇の外護のもとに高雄山寺（神護寺）を中心に密教を広め、高野山金剛峰寺を開いて真言の道場とした。さらに京都の東寺も下賜され、真言密教の高揚につとめた。承和二年（八三五）、六十二歳の生涯を閉じたが、その間四国満濃池（まんのういけ）の修築、我が国最初の民間学校である綜藝種智院の開設、日本三筆の一人としても有名であり、その活躍は文学・美術・書道・教育・建築・灌漑治水・医薬などありとあらゆる文化面に及ぶ。

入定後八六年の延喜二十一年（九二二）に、醍醐天皇から「弘法大師」という大師号を受けた。「大師」は何人もいるが「お大師さま」といえば空海を指している場合が多い。（Y）



真言八祖像

室町時代

絹本着色 二幅対

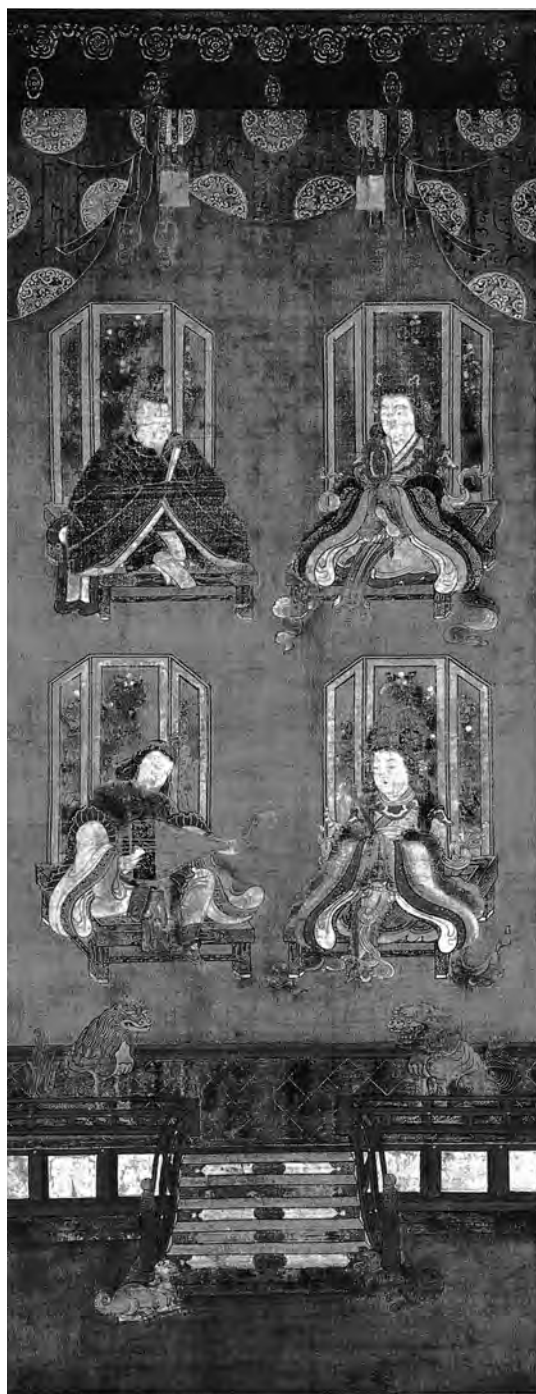
(各) 縦九・五 横三・五

真言密教をインドから中国、日本へと伝えた八人の祖師像である。

右図右下は第一祖龍猛りゅうみゆう、右手に三鉤杵さんこうしを持つ、左下が第二祖龍智りゅうち、右手に経文を持つ、上段左は第三祖金剛智こんごうち、右手に数珠を持つ、同右は第四祖不空ぶくう、外縛印げふくいんを結ぶ、左図右下が第五祖善無畏ぜんむい、右手人差指にんさしゆを立てる(以上五人はインド僧)、同左は第六祖一行いっぎやう、法衣の中で印を結ぶ、上段左は第七祖で、空海の師である恵果けいか、傍に童子を従える、(この二人は中国僧)、同右が第八祖空海(弘法大師)、右手に逆手で五鉤杵ごこうし、左手に念珠を持つ姿である。

(Y)

見本



高野四社明神像

室町時代

絹本着色 一幅

縦一〇〇・〇 横四〇・〇

高野山の地主神である四社の神々を描く。上段右は唐扇を持つ丹生明神（一宮）、同左は笏を持つ狩場明神（二宮）、下段右は払子を持つ気比明神（三宮）、同左は琵琶を弾く厳島明神（四宮）である。中央の階段を上がった高欄の内側左右に獅子と狛犬、階段下に白黒の二匹の犬を描く。この犬は、唐から帰国した空海が修行にふさわしい霊地を探していたところ、犬を連れた狩人（狩場明神）が現れ、高野山麓の天野まで導いたという伝承に基づく。（Y）

見本



金剛界大日如来坐像

紙本着色 一幅

縦一一・〇 横五二・一

密教では、大日如来を宇宙のすべての諸仏・諸尊の最高位に位置づけ、大日如来の持つ「智」の内容を金剛界で、「理」の内容を胎藏界で表わすとされる。

一般に、悟りを開いた人を表す「如来」は、装身具を一切身につけない薄衣の姿で表現されるが、大日如来は、宝冠をいただき、瓔珞などの豪華な装身具を身につけた姿として表現される。本図の金剛界大日如来は、左の人差し指を右手で包む智拳印を結び、脇侍として不動明王と弥勒菩薩を従えている。

(Y)

見本



不动明王坐像

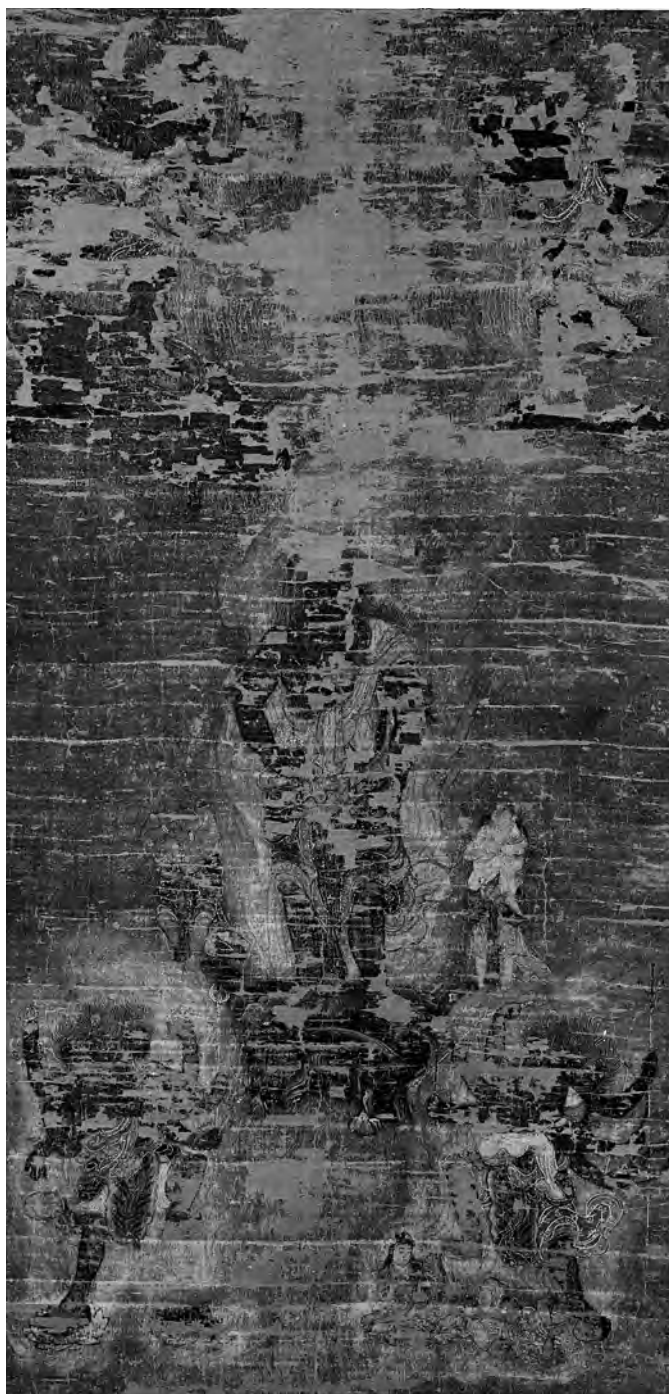
寛政九年（一七九七）

紙本着色 一幅

縦一三七・〇 横七四・〇

不动明王は、密教特有の尊格である明王の一尊であり、密教の根本尊である大日如来の化身とされる。強烈な法力を持ち、煩惱を抱える最も救い難い衆生をも力づくで救う為に、憤怒の姿をされ、密教修法の中でも最も尊敬されている。災害を取り除き、所願成就の功德があるとされている。像容は左に索髪を垂らし、両眼を大きく見開き、上歯で下唇をかみしめ、右手に剣、左手に捕り縄を持ち、瑟瑟座という特別の盤石上にあり鉢から猛焰を放っている。（Mk）

見本



五大明王像

室町～桃山時代

絹本着色 一幅

縦七三・五 横三八・〇

五大明王は、密教特有の尊格である明王のうち、中心的役割を担う五名の明王を組み合わせたもの。全ての明王は大日如來の化身とされ、なかでも不動明王には東西南北に変身する力がある。中央に不動明王、東に降三世明王、西に大威徳明王、南に軍荼利明王、北には金剛夜叉明王と、五明王に変身して人々（衆生）の心の奥に潜む魔障から救い守らんと必死に力む憤怒の形相をしている。（Mk）

見本



波切不動明王立像

室町時代

絹本着色 一幅

縦九〇・〇 横三七・〇

波切不動尊は、弘法大師空海が留学を終え唐より帰朝する際に、師である長安の青龍寺 恵果より、風波の難を避けるための仏を作るよう命ぜられて出来た不動明王である。弘法大師空海が唐からの帰国途中、嵐に遭遇し船が難破しかかった時に、木で彫り上げたその不動明王に波が静まる事を祈願されて波の中に投げ入れたところ波はおさまり、その御蔭で、弘法大師は無事に日本に帰国することが出来た。それ以降、海難除け、航海安全の神様として祀られていたが、現在では諸願成就に変わってきた。(Mk)



鉄塔愛染明王像

紙本着色 一幅

縦一〇五・五 横四二・〇

愛染明王は大日如来の化身である明王のなかでも、家庭円満の法力を持ち、無病息災、利福のご利益があるとされる。図容は武勇に優れていた王子の頃の釈尊をモデルとしている。頭上に獅子冠を戴き、三面六臂で手には、金剛鈴・五鈷杵などの法具の他に弓・矢を持ち、全身は愛情を表現する為に真紅に燃え、また、後ろには紅焰に燃える赤い日輪を背負う。宝瓶付きの蓮華座に結跏趺坐する。本図は厨子の愛染明王を中心に周囲に諸尊・諸仏が囲み、全体で愛染曼荼羅図を構成している。(Mk)

見本



三宝大荒神像

絹本着色 一幅

縦九一・五 横三四・六

荒神は仏典にも記載がなく不詳であるが、神仏習合思想の間から生まれたとされている。人々に極めてたたりやすく不幸をもたらす荒魂の神とされ、それからの危害をさけるため信仰の対象となった。如来荒神・亂荒神・忿怒荒神の三身からなり、民家の代表的な屋内神で、火の神、かまどの神として祀られる。激しく崇りやすい性格をもつ一方、火伏せの靈験があるとされる。(T)

見本



釈迦三尊像

室町時代

絹本着色 一幅

縦九三・〇 横三九・四

本尊の釈迦如来とその両脇の二尊で一組。

向かって右側に釈迦の知恵を表わす文殊菩薩が獅子の背に乗る。空に立脚するその知恵がこの菩薩の特性であり「文殊の知恵」の語が由来する。左側に釈迦の悟りの内容を表わす普賢菩薩が白象に乗って守護する。

仏教の開祖である釈迦如来はこの二尊を備え、広く衆生を救済する。(T)

見本



釈迦十六善神像

絹本着色 一幅

縦一〇〇・二 横五二・三

釈迦にはその教えに追従した多くの弟子たちがいるが、十六善神は十二神将に四天王を加えたものともされ、仏教を守護することを誓った仏教以外の異教神。煩惱を打ち破り悟りの境地に達した選ばれた弟子たちである。その中には、釈迦の子供も含まれ、仏滅後も永くこの世に住み、衆生を救う使命をもつ。おのおの超人間的に描かれ、侍者や持物にも制約がある。(T)



薬師三尊像

絹本着色 一幅

縦九六・八 横三七・九

薬師如来を中央に、脇侍として、向かって右に日光菩薩、左に月光菩薩を配する。仏教伝来後の比較的早い時期に登場し、諸種の如来の中でも最も大衆の信仰を集めた。平安時代には、天台宗や真言宗で元来の本尊とは別に、一時は薬師如来が本尊になったほどに信仰された。病氣平癒を願い、右手をあげ心配するなど諭す。脇侍の日光菩薩、月光菩薩とともに薬師瑠璃光浄土の代表的な菩薩として各々日輪、月輪を持っている。(T)



阿弥陀三尊来迎図

桃山時代

絹本着色 一幅

縦八九・五 横三九・〇

阿弥陀如来が、慈悲を表す観音菩薩・智慧を表す勢至菩薩を脇侍に従えて、信仰深い衆生の臨終に迎えに現れ、極楽浄土へと導く様子（来迎）を描いたものである。

中央の阿弥陀如来は来迎印を結び、向かって右の観音菩薩は往生する人の魂をのせる蓮華台を差し出し、左の勢至菩薩は胸前で合掌している。

阿弥陀三尊来迎図は平安末期から鎌倉時代にかけて極楽浄土の思想が普及したことにともなってさかんに描かれた。（W）

見本



帝釈天



梵天



火天



地天



羅刹天



閻魔天

十二天像

絹本着色 十二幅対
(各) 縦九六・〇 横三四・〇

十二天は天部に住む神でインド古代神などが仏教にとり入れられて護法神となったもの。日本では世を守護する十二の神として信仰されている。八方位(東西南北の四方と東北・東南・西北・西南)の八天に天地(上・下)の二天、日月の二天を加える。

帝釈天(東) 火天(東南) 閻魔天(南)
羅刹天(西南) 水天(西) 風天(西北)
毘沙門天(北) 伊舎那天(東北) 梵天(上)
地天(下) 日天(日) 月天(月)。

見本



毘沙門天



伊舎那天



日天



風天



水天

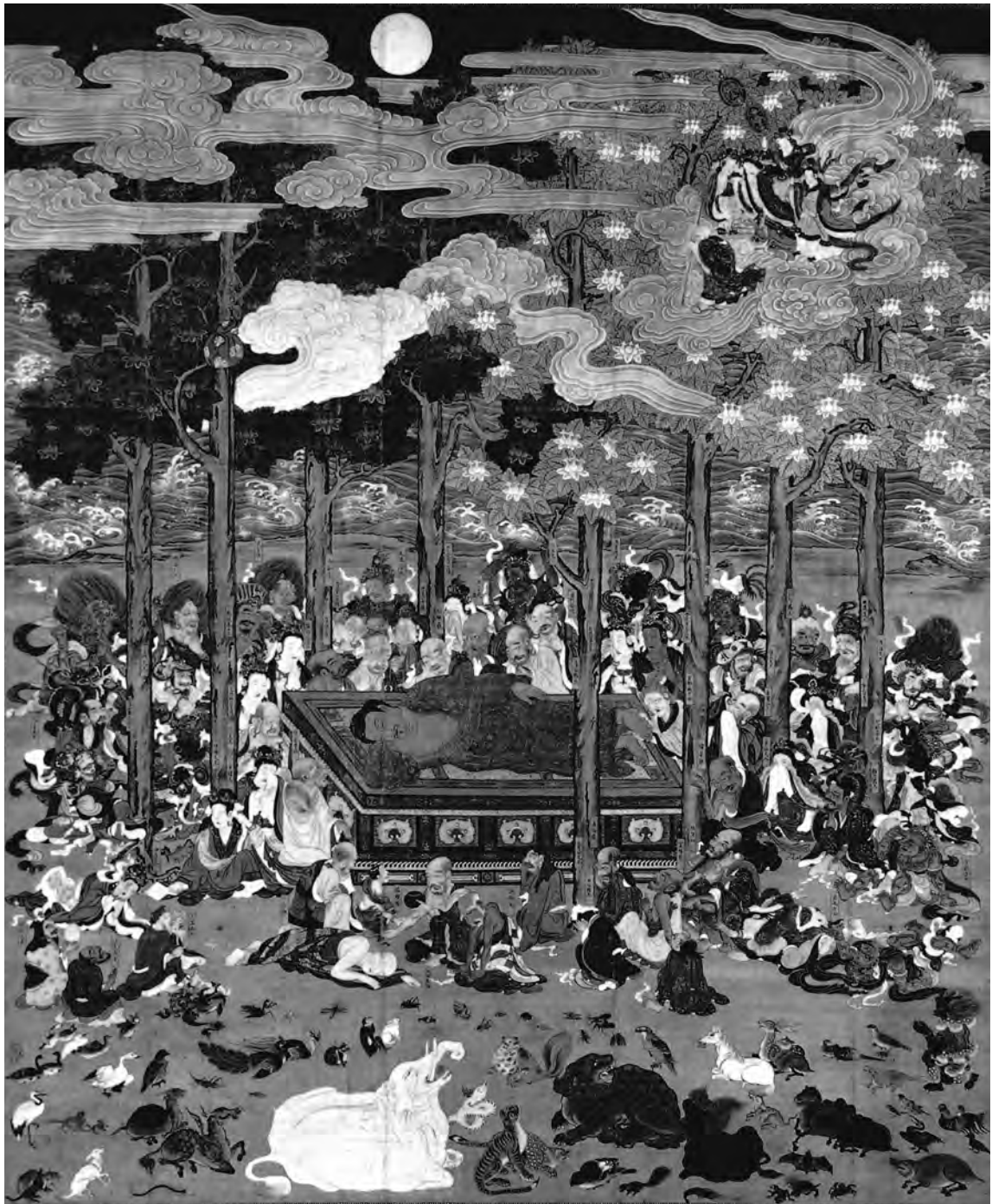


月天

図の上部に種子（一字でもって仏を表す梵字）を頭上に付けている場合が多い。千光寺では観音堂内にある。（W）



見本



仏涅槃図

絹本着色 一幅

縦一八九・七 横一五八・〇

釈迦入滅の場面を描いたもので、釈迦入滅前後の状況を記した「涅槃経」に基づいて描かれている。

二月二十五日、インドの拘尸那竭羅（クシナガラ）の跋提河^{ばつだいが}のほとりで八本の沙羅双樹に囲まれた宝台に、釈迦が頭を北に、顔を西に向け、右脇を下にして横たわっている。その周囲には弟子達をはじめ、諸王・大臣・諸天のほか、阿修羅などの鬼神、動物や虫までが釈迦の死を嘆き悲しんでいる。上空には釈迦の死を聞いて駆けつける母の摩耶夫人も描かれている。（W）

見本



地獄図

紙本著色 二幅対

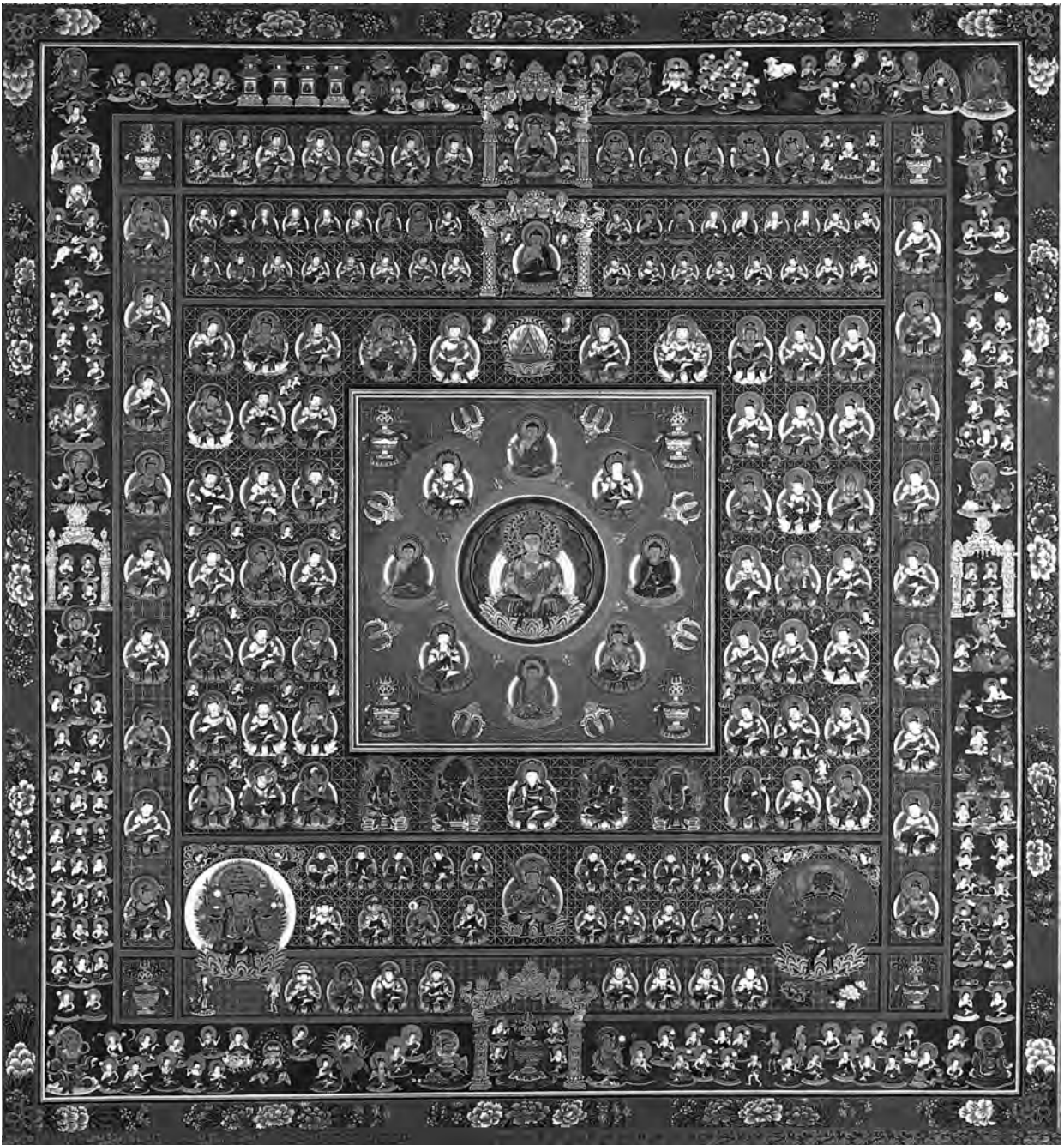
(各) 縦一七八・〇 横九六・五

地獄は、六道輪廻（天、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄）の最下層に位置し、現生で悪行をなした者が死後送られる因果応報の世界。生前の罪状が十王により審判され、それぞれの罪状により鬼・獄卒達が罪人を呵責する処。八大地獄をはじめ八寒地獄等百三十六の種類がある。

地藏菩薩（閻魔大王の本地仏）は、その地獄の猛火に救いの手を差し伸べる霊験力があるとされる。

また、禅的解釈では、地獄の底には「金輪際」という際があり、そこで跳ね返って上昇し始めると言う。（S）

見本



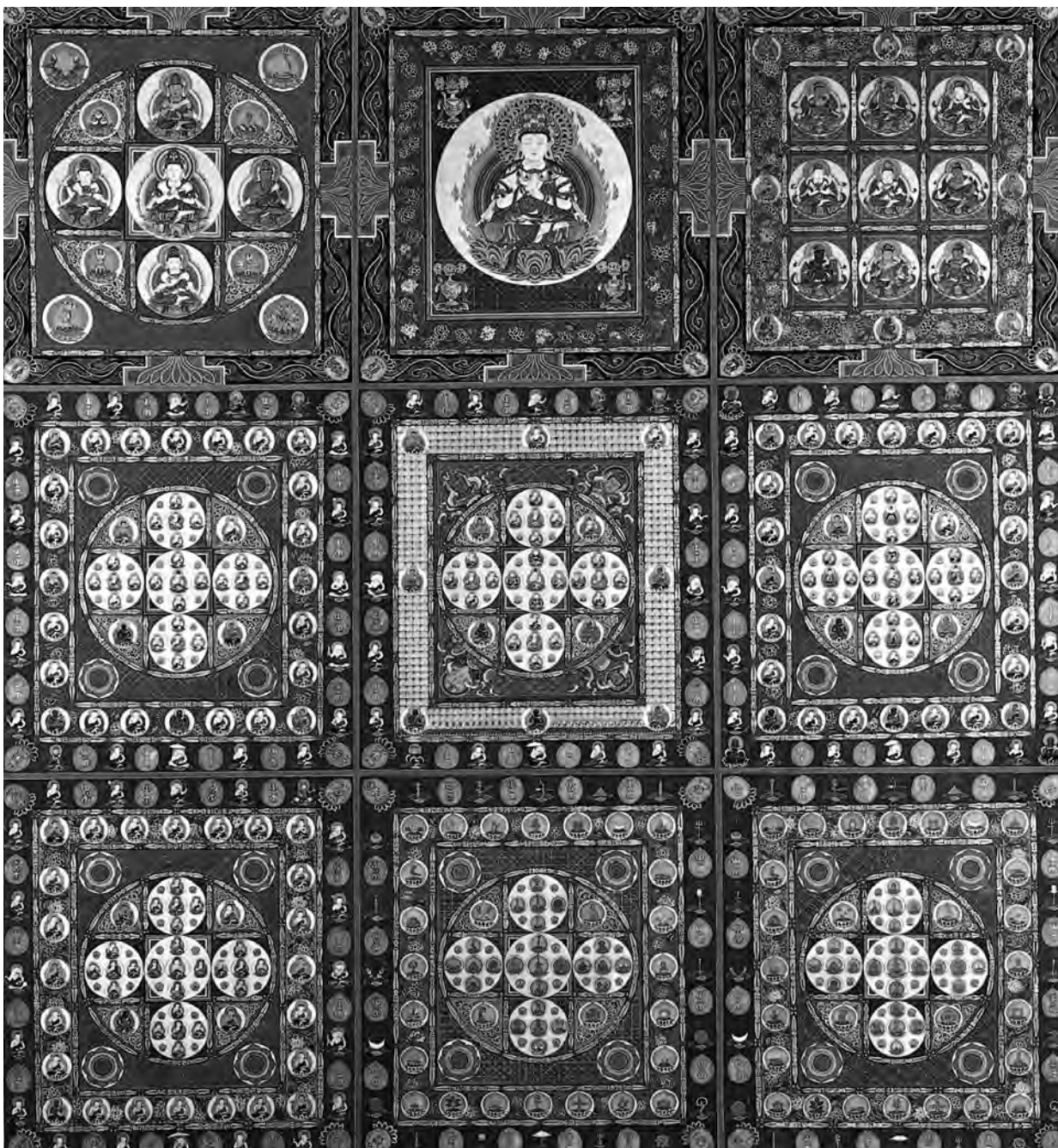
両界曼荼羅図

絹本着色 二幅対

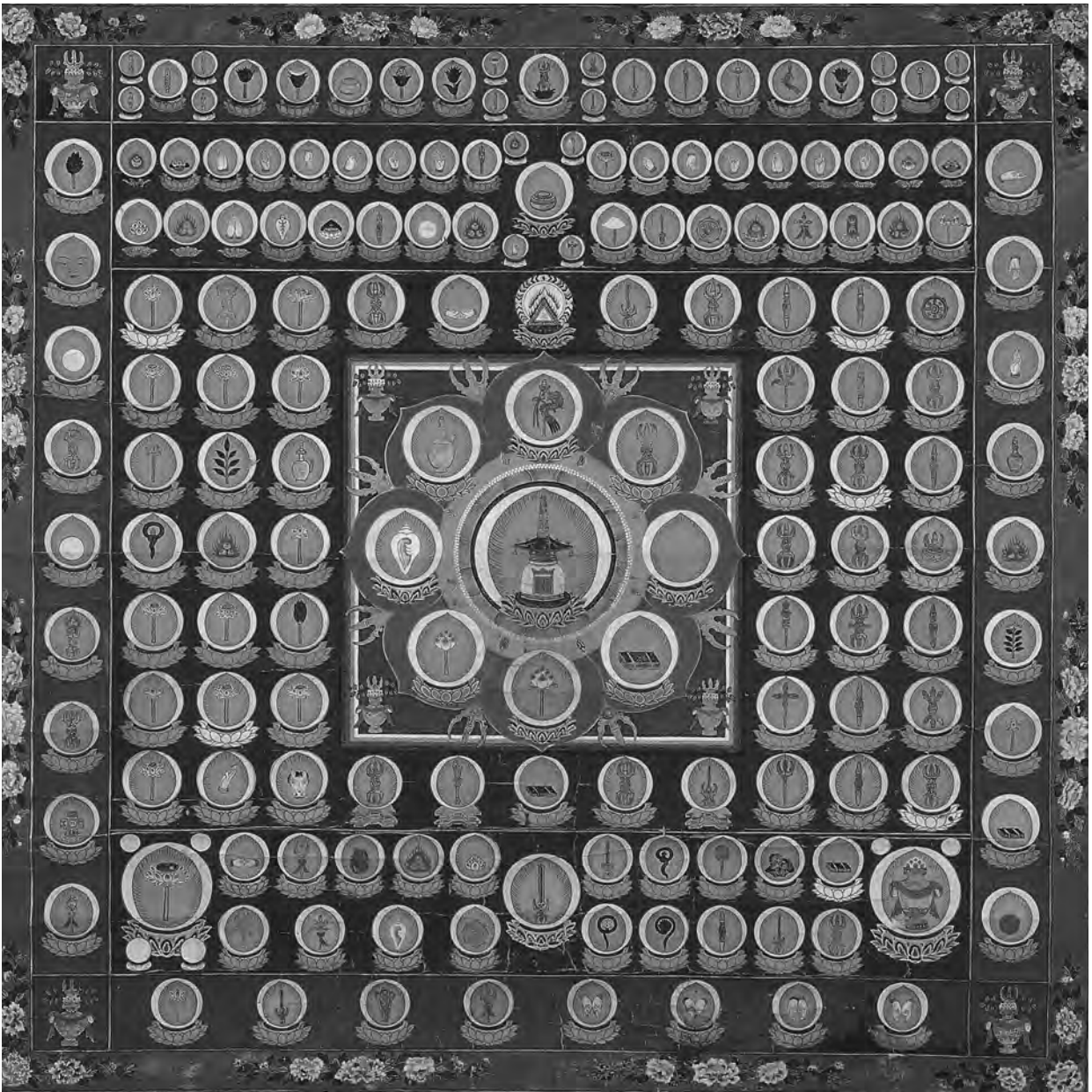
(各) 縦一五・五 横一四・五

一八、一九ページにも詳述してあるが、両界曼荼羅は、大日経、金剛経の両部大経が説く密教の最高理念を、大日如来を中心にあまたの諸尊を画像化することによって絵画的に表現したものである。その構成は胎藏界と金剛界から成っている。

県指定文化財の両界曼荼羅図は鎌倉時代の作である。この曼荼羅は江戸時代に作成されたもので、大きさもあり迫力ある曼荼羅図となっている。(Ot)



見本



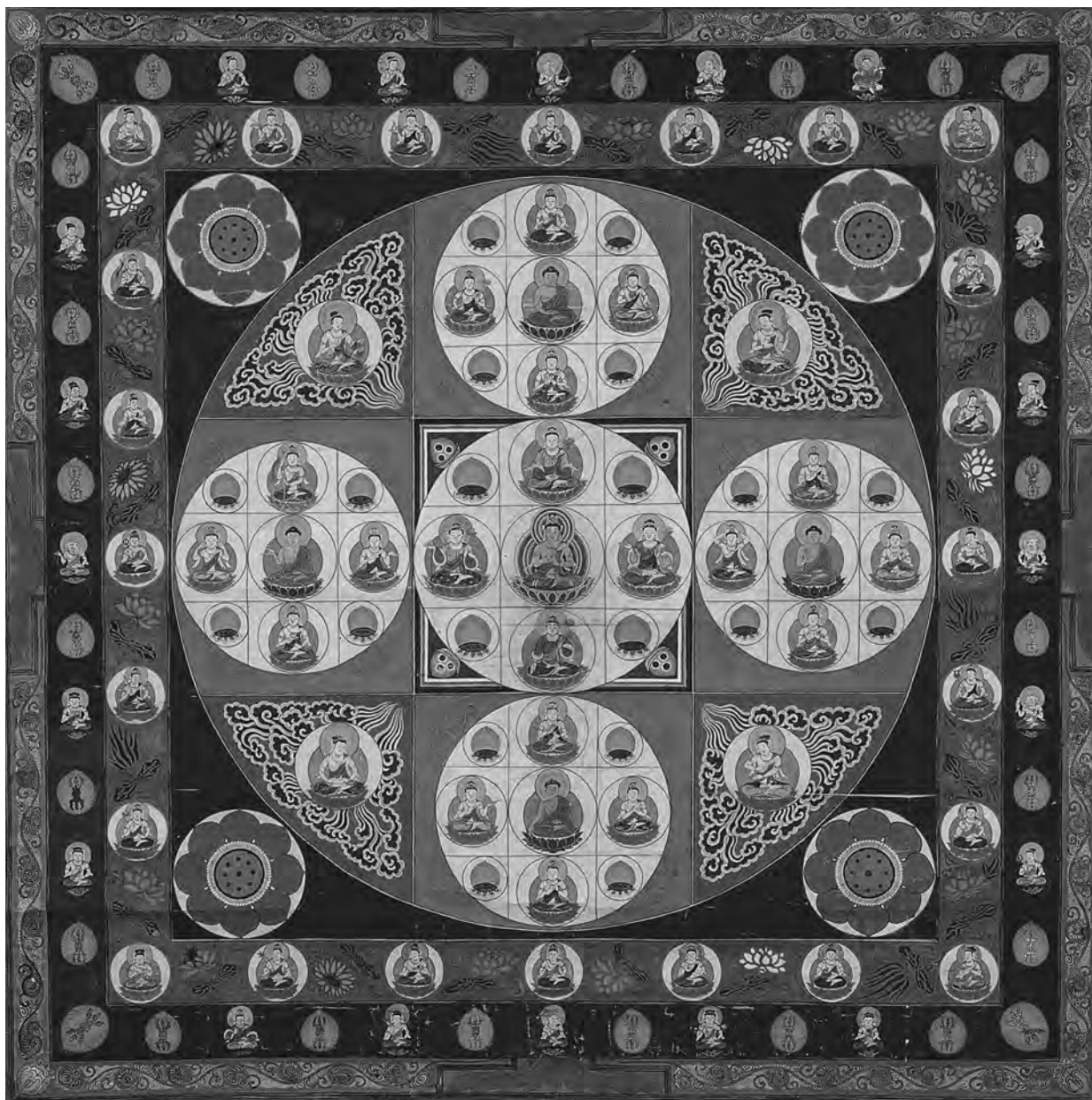
敷曼荼羅図

絹本着色 二幅対

(各) 縦二二七・五 横二二〇・〇

千光寺で行われる灌頂かんじょうの際に壇上に敷いて投花の儀を行うのに用いられる金剛界、胎蔵界の二幅対の両界曼荼羅図である。大乘仏教で仏の五智を象徴する水を頭頂に注ぎ、悟りの位に達したことを証する儀式を灌頂と言う。のち師が弟子に対して行い、仏位の継承を示す重要な儀式である。元来はインドで、国王の即位や立太子に際して行われたものである。

千光寺でもこの敷曼荼羅で、灌頂が行われたことを物語っている。(Ot)



両界曼荼羅の構成と真言宗用語解説

砺波市美術館学芸員 長田 里恵

見本

●阿闍梨（あじやり）——阿闍梨耶の略。いっぽんに密教の師。弟子の行いを正しその規範となる高德の師のこと。日本では、一身阿闍梨（その人がぎりの地位としての阿闍梨）・伝法阿闍梨（密教の大法を伝える）・七高山阿闍梨（比叡山・比良山・伊吹山・愛宕山・神峯寺・金峰山・葛木山に置かれた阿闍梨）などの名称も生まれた。

●灌頂（かんじょう）——灌頂とは水を頂に注ぐ意。古代インドにおいて国王の即位などの式典の際、四海の水を注ぐ儀式を、仏教が採用したもの。灌頂には一般に結縁・受明・伝法の三種がある。結縁灌頂とは、壇上で花を投げて曼荼羅の仏菩薩と縁を結ぶこと（投花得仏という）。受明灌頂とは弟子になるのを許されること。伝法灌頂はもっとも重要なもので、修行を終え師位を得ることを意味する灌頂である。

●結縁（けちえん）——仏と縁を結ぶこと。仏事や作善のいとなみに参加し、仏縁にあやかること。密教では結縁灌頂が有名で、曼荼羅に向かつて花を投げ、諸尊の中から自分の守り本尊を選び出した。

●結跏趺坐（けっかふざ）——坐法のひとつ。両足を両股の上で交差させて組む。二種類あり、左足を右腿の上に付け、次に右足を左腿の上に付け、両足裏を両股上に仰向けにしたものを吉祥坐という（右上左下）。反対に左上右下で組んだものを降魔坐という。結跏趺坐は如来の坐法であるので如来坐ともいう。

●華鬘（けまん）——もとインドの風習で生花を糸で綴って装身具としたが、転じて仏・菩薩の供養具となり、さらに堂塔内陣の荘厳具ともなった。この場合とくに華鬘代という。華鬘代はおおむね団扇形をなし、唐草文や蓮華文を切り透かしたものが多く。

●護摩（ごま）——もとインド婆羅門教などで重んじられた供儀の形式で、のち密教修法に取り入れられたもの。炉中に火を燃やし、供物を焼いて諸尊に供養

する法。宗教的には、聖なる火をもって煩惱を焼き尽くす意味もある。修法の目的によって息災・増益・調伏・敬愛・鉤召の五種に分類される。

●金剛界曼荼羅（こんごうかいまんだら）——密教の根本曼荼羅。両界曼荼羅のひとつ。『金剛頂經』に基づき、大日如来の智の内容を表す。胎藏界曼荼羅と一対のものとして扱われる。東密（真言密教）では通常、九つのブロックからなる九会の曼荼羅が用いられるのに対し、台密では一会だけの金剛界八十一尊曼荼羅が用いられることも多かった。

●金剛杵（こんごうしよ）——もと古代インドの武器。密教では、仏の智慧がしっかりとっていて堅固なことを表わし、また煩惱を打ち砕く働きを象徴すると解釈し、諸尊の持物として、修法の道具として用いたりする。中央部に把手（把）、両端に鋭利な刃（鉈）がある形。古いものほど元来の武器の鋭利さを表現する。鉈部がいくつに分かれるかによって、独鉈（剣のようなひとつの鉈）・三鉈・五鉈杵といった分類があり、これに宝珠・塔杵を加えて五金剛杵と称する。

●金剛鈴（こんごうれい）——一種の楽器。密教修法の時、諸尊を驚き覚まし歓喜させるために、また衆生の眠れる仏心と呼び覚ます意味で振り鳴らす。把手の先端部を金剛杵の形に作るところから金剛鈴という。先端が独鉈・三鉈・五鉈・宝珠・塔の形を成すものを五種鈴といい、大壇の四方と中央とに安置する。↓金剛杵の項参照

●真言（しんごん）——マントラの訳。もとは古代インドの神聖な呪句をいった。呪句をとなえる習俗が密教に取り入れられ、さらに中国・日本に伝わってからは原語（梵語）の呪句がそのまま残され、真言といわれるようになった。その神秘的な音声に密教の真理が宿ると解釈され、空海が開いた密教にもその名称が冠されることになる。密語・密言・陀羅尼・明・

神咒・咒などの異名がある。

●胎藏界曼荼羅（たいざうかいまんだら）——密教の根本曼荼羅。両界曼荼羅のひとつ。大悲胎藏生曼荼羅、胎藏曼荼羅とも。『大日經』に基づき、大日如来の理の内容を表わすとされる。胎藏とは母体（子宮）のこと、衆生が本来備えている菩提心（悟りの種子）が、万法に保護され養育されることを意味する。金剛界曼荼羅と一対をなし、図様は十二のブロック（十二大院）から構成される。

●台密（たいみつ）——天台密教の略。比叡山延暦寺と園城寺を中心として広まった密教のこと。最澄が唐から請来した密教は組織的なものではなかったため、円仁・円珍・安然などの後継者が整備につとめ、東密（真言宗のこと）とはちがった体系を築き上げた。東密との教学上の大きな相違点は、金剛界・胎藏界の両面に蘇悉地部を加えて三部の構成をとなえる点にある。

●陀羅尼（だらに）↓真言（しんごん）
●断簡（だんかん）——切ともいう。もと冊子や卷子に書かれていたものの一部が切断されて残ったもの。

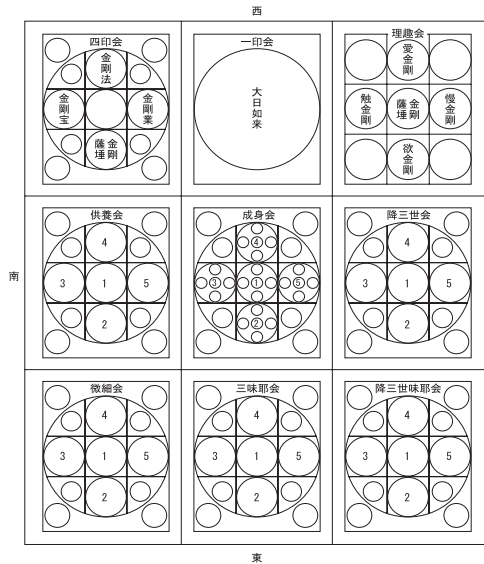
●天衣（てんね）——菩薩や天部像が上半身にまとう細い带状の布のこと。綬帶ともいう。

●伝法灌頂（でんぽうかんじょう）↓灌頂（かんじょう）
●東密（とうみつ）——東寺の密教の略。東寺を根本道場として広められた密教のこと、すなわち空海が開いた真言宗をいう。天台宗側が、最澄の後継者たちによって密教が整備され、真言宗に対抗する密教勢力となるにいたり、台密（天台密教の略）に対し東密と呼ばれるようになった。↓台密の項参照

●比丘（びく）——声聞ともいう。仏門に帰依して戒（具足戒）を受けた者。修行僧。密教を含む大乘仏教では、菩薩よりも一段低い階位に置かれ、菩薩が衆

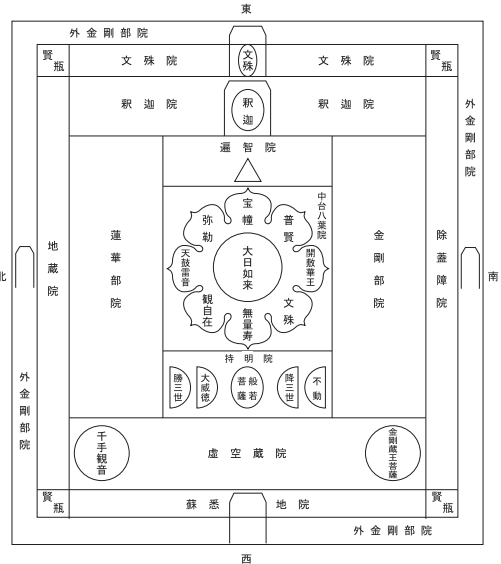
衆

金剛界曼荼羅



- 1 中央大日如来
- 2 四方四親近菩薩
- 3 中央阿闍梨如来
- 4 四方四親近菩薩
- 5 中央宝生如来
- 6 四方四親近菩薩
- 7 中央無量寿如来
- 8 四方四親近菩薩
- 9 中央不空成就如来
- 10 四方四親近菩薩

胎藏界曼荼羅



生の救済を優先させると違って、自分の悟りを優先させる部類を指すことが多い。

●梵字（ぼんじ）——インドの言語である梵語を記載する時に用いる文字をいう。悉曇文字とも称する。その字体は時代と地方によって変遷がある。尊像を梵字で象徴させる場合、これを種子という。密教徒にとっては必須の学習項目だった。

●本地垂迹（ほんじすいじやく）——日本の神々は本来は仏であり、仏教の諸尊が日本の人々を救済するために神という姿で現われた（迹を垂れる）という考え方。密教の変化身（へんげしん）の考え方も近く、中世には完全に一般化する。その思想の普及にともない垂迹画像が盛んに制作された。

●瓔珞（ようらく）——貴金属と珠玉を連ねた装身具で、もとインド貴族の飾りの風習によるもの。仏・菩薩に用いる。首に掛けるだけでなく、臂・手・足・瓔珞などの用例もある。明王などでは蛇または髑髏を瓔珞とするものもある。また仏堂の荘厳具や供養物などにも瓔珞を用いる。

●寄木（よせぎ）——仏像の造像技法のひとつ。十一世紀の仏師定朝によって大成された。複数の部材を規則的に組み合わせ、そこから頭部を含む像の根幹部を彫り出す方法。大きな材木がなくても巨像の造像が容易となり、また分業製作が可能になった。

●来迎（らいごう）——臨終に際して仏・菩薩が浄土から迎えに来ること。日本では、平安時代に阿弥陀仏と極楽浄土往生の信仰が隆盛し、末法到来の思想とも重なって阿弥陀や諸尊の来迎への期待が一世を風靡した。阿弥陀ないし諸尊の来迎の様を描いたものを来迎図という。

●螺髪（らほつ）——多数のほら貝（巻貝）型を並べたような仏像の髪形。木彫の小像では格子目状の直線に彫り込むだけの場合もあるが、巨像では一個ずつ別に造り植えつけることがよく行われる。

●阿闍梨曼荼羅（りようかいまんだら）——大日如来を主尊とし、密教諸尊を金剛界曼荼羅と胎藏（界）曼荼羅の二種の体系に統合して構成された最も大規模な

曼荼羅。この二種の曼荼羅は元来インドにおいて別々の起源を持ち、中国への伝来も別であるが、空海の師恵果によって一対のものとされた。↓金剛界曼荼羅・胎藏界曼荼羅の項及び上図参照

●輪宝（りんぼう）——古代インドの武器。密教では回転すると万物を打ち砕き煩惱を破ると考えられた。形は刃をつけた車輪にかたどる。密教法具として使用されたほか、文様にもしばしば応用された。

●六器（ろつき）——修法壇に供える闍伽水（清浄な水）・塗香・華鬘を盛る器。各二個あり六個を一具として用いるため六器と呼ばれる。通常、高台のついた金属製の小碗に台皿を備える。

●脇侍（わきじ）——中尊の左右あるいは前後に随侍するもの。中尊の種類によって脇侍になる尊像も変化する。たとえば、釈迦如来には文殊・普賢菩薩、薬師如来には日光・月光菩薩、阿弥陀如来には観音・勢至菩薩など、およびその構成が決まっている。

●割刳（わりはぎ）——木彫像の造像技法のひとつ。頭部を含む像の根幹部を一枚から彫り出し、木の縦目にそって割り離し、内刳した上でもとどおりに知ぎつけて仕上げる。干割れを防ぐために施された。

千光寺の彫刻

となみ散居村ミュージアム館長 白江 秋広

千光寺には、古代から連綿と信仰が息づいていた。戦国時代には争乱により数度にわたり戦禍に遭い多くを焼失したとされている（元和四（一六一八）年の火災）。しかし白鳳期の様式を示す銅造観世音菩薩立像を始めとして、仏像彫刻の優品が多く残されている。これは歴代住職や檀信徒の、篤い信仰心の賜物である。

「不許葦酒入山門」の結界石を過ぎると、山門には阿吽の仁王像、観音堂の須弥壇上にある厨子には秘仏の観音像が安置され、その前にはお前立の観音像が置かれている。秘仏を護るように増長天と多聞天が邪鬼を踏みながら構えている。後部には木造の三十三ヶ所観音がずらりと並び、奥の堂には開基法道上人像が安置されている。回廊の中央部には閻魔王と十王等が鎮座し、本殿には五智如来がそれぞれ安置され、脇には弘法大師、地藏菩薩が安置され、それぞれの空間が荘厳されている。

参道脇の地藏堂の中には、笏谷石製の弘法大師像が置かれている。





愛染明王坐像

木彫彩色（漆塗厨子入）一軀
総高二八・〇

（像高一〇・五 厨子高三八・〇）

愛染明王は厨子内にあり、左右の扉二面には、金箔地に四金剛、四金剛女、降三世、金剛夜叉明王を表し、全体で愛染曼荼羅を構成する。

小ぶりながら金箔を貼った截金文様等緻密な細工が施されている。獅子冠をかぶり、手には密教法具の五鈷杵、五鈷鈴、弓矢、蓮華をとり、真紅の蓮華座上に結跏趺坐する。全身真紅の憤怒相であるが、内心は大愛至情の本性を持つとされる。（S）

見本



多聞天

仏教的世界観では、世界の中心である須弥山^{しゆみせん}の四方の門を守る四天王がある。持国天^{ちこくせん}が東勝身州^{とうしょうしんしゅう}を、増長天^{ぞうちやうてん}が南瞻部州^{みなみせんぶしゅう}を、広目天^{くわうもくてん}が西牛貨州^{にしごか}を、多聞天^{たもんてん}が北俱盧州^{ほくくるしゅう}をそれぞれ守護する。

本来、像容等は決まった形がないとされるが、当寺の増長天と多聞天は、それぞれ手に宝塔や宝棒を持ち、五穀豊穰や仏の説法を受け持つとともに、須弥壇の結界の要となっている。(S)



増長天

増長天立像

木造彩色 一軀

横幅四二・三

奥行五二・〇

像高一三七・七

多聞天立像

木造彩色 一軀

横幅四三・〇

奥行五二・〇

像高一四三・五



閻魔王坐像

木造彩色 一軀

横幅一〇・〇

奥行七五・〇

像高一三〇・〇

閻魔王と十王

人が死ぬと、三途の川を渡るところに奪衣婆と懸衣翁がおり、婆は服を奪い脱がせ、翁は服を衣領樹に懸ける。そして裸になり冥界の十人の王の裁きを受けなければならない。その裁きによって来世が決まり、七日ごとに審理が行われ、初七日は秦広王、一四日初江王、二一日宋帝王、二八日伍官王、三五日閻魔王、四二日變成王、四九日太山王、百日平等王、一周忌都市王、三回忌五道転輪王とされる。判決は四九日に六道つまり、天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道に生まれ変わりを宣告される。

この閻魔王は本地仏が地藏菩薩であり、五道転輪王は阿弥陀如来である。堂の中には、司録、鬼卒、業の秤、浄玻璃鏡、檀拏幢などがある。(Ot)



見本

千光寺仁王像の謎

修復を手がける仏師を訪ねて

野原 大輔

千光寺山門の両脇に立つ仁王像。ある日、その腕がボトリと落ちた。

像が経年劣化したのである。すぐさま寺は修復を行うことを決め、平成二十四年十一月六日、遠く滋賀県大津市の園城寺（三井寺）に搬送した。先代管長と石丸正運氏に親交があったので修復先に選ばれた。平成二十五年九月二十五日には千光寺の文化財を守る会一行が石丸氏の案内で修復現場を訪れている。

■仁王像とは

仁王は金剛力士のこと。仏法を守護し、外敵の進入を防ぐという意味がある。

もともとは金剛杵を持ち甲冑で身を固めた一体の執金剛神だったが、二体一対で造られるようになり、二つの王の意で仁王と呼ばれるように。口を開けるのが阿形、口を閉じるのが吽形。上半身裸で筋骨隆々とし、血管が誇張され、忿怒相の躍動感あふれる姿が主流である。

■仏師 川口圭太氏

二体の仁王像は園城寺佛教尊像修復院の川口圭太氏のもとに運ばれた。ここで約二年の歳月をかけて修復が行われる。

高校野球の熱戦が続く平成二十六年八月十二日、修復の様子を伺いに末永

忠宏氏と二人で修復院を訪れた。

仏師と聞くとどうしても孤高で老練な職人気質の人を思い浮かべるが、川口氏はまったくその逆。弁舌さわやか、笑顔が似合う若い仏師だった。

昭和五十二年生まれの三十七歳。兵庫県川西市出身で十九歳の時に新聞での募集がきっかけで寺に入り、仏師である故・高橋俊夫に師事した。これまでに一〇〇体以上の仏像を修復した経験をもつ。

■修復の経過

まずは阿形、続いて吽形の修復が行われた。その工程は、気の遠くなるような作業の積み重ねだ（下の図参照）。これを二人の仏師で行う。解体まで済めば「八割方終わったようなもの」。我々が訪れた時、阿形は組み上がり、まさに「仁王立ち」。漆が塗られ全身が真っ黒。片や吽形は解体され、バラバラの状態だった。

意外だったのは彩色の除去。木の地肌の上に麻布を貼って彩色するので、色を落すのではなく、色を剥ぐという感じ。

肝心の部材は「木としては健康な状態」なのでほとんど補修は必要ないとのこと。腕が落ちたのは接着剤のニカワ（膠）が劣化したことが原因だ。今

回の接合にはニカワではなく、漆を使うという。

接合や組立では鉄のかすがいも用いる。新たに用意されたものは、薬師寺西塔再建の際の「千年の釘」で有名な鍛冶師白鷹幸伯氏が手がけたものだそう。

■仁王像の謎

修復というのは単に「直す」だけでなく、像を「知る」作業に他ならない。しかし、いくつかの謎が浮かび上がった。

《謎その1》いつ造られたのか

一般的には体内の墨書銘などで造像年がわかるが、見つからなかった。もしや山門の棟札がそれを兼ねていたのか。川口氏の見立てでは像が作られて約二〇〇年。寛政九年（一七九八）に山門と一緒に作られたとすると年代はピッタリだ。

また、過去に2回の修復（部分解体）の痕跡がある。時代は近代とそれ以前。修復方法を見れば凡その年代がわかる。

《謎その2》なぜ部材が細かいのか

仁王像は寄木造である。川口氏の第一印象は「お姿が良くまとまっている見事なプロポーション」。ちなみに像はヒノキとスギを混用しているが、驚くべきは部材の多さ。解体作業を通して複雑な木寄せが明らかになった。少ない部材で作るのが普通だが、なぜあえて手間の掛かることをしたのか。「相当腕が立ち柔軟な考えを持つ、仏師の仕事」と川口氏は見ると。また、首の根元の白木の部分に漆を塗る特徴的な方法も見つかった。

謎は永遠に解けないかも知れない。だが修復は仁王様と対話する最良の術だと若き仏師から教えてもらった。





解体された吽形の部材



園城寺の奥にたたずむ修復院



漆塗りの段階まで進んだ阿形像



笑顔が素敵な川口仏師



白鷹幸伯氏によって鍛えられたかすがい



血管が浮き出る吽形像の腕

芹谷山千光寺と法道仙人

砺波郷土資料館主任学芸員 安力川恵子

法道仙人は天竺（インド）の靈鷲山（注1）に住む五百持明仙（注2）の一人で、日本に渡来したという伝説上の人物である。鉢を飛ばして布施を乞う「飛鉢の法」をよくし、空鉢仙人ともいわれる。この法道仙人は、鎌倉時代末期に虎関師錬が著した『元亨釈書』の中に紹介されている。『元亨釈書』には、仏教の伝来から元亨二年（一三二二）までの約七百年間にわたる多くの実在の高僧や尼僧、熱心な仏教信者・神仙など四百余名の伝記や、皇室関係の仏教に関する事績などが年代順に記されている。法道仙人は「神仙」の部の中に、皇太神宮や丹生明神などとともに記載されている。

この法道仙人を開基として伝承している寺院は播磨を中心に丹波・摂津などに多くひろがり、その数は二〇〇にも達するとされる（注3）。法道仙人は行基菩薩や弘法大師などとは異なり、地域的に限定されたところで信仰されている仙人であるが、近畿以外でも九州北部の豊前や、北陸の能登から越中・越後などにも若干の伝承寺院がある。

北陸では能登の石動山や越後の米山、越中では砺波市千光寺（現真言宗）のほかに、氷見市大栄寺（現浄土宗）、同上日寺（現真言宗）、小矢部市観音寺（現真言宗）などがある。

（注）

1 霊鷲山（りょうじゆせん） インドのビハール州のほぼ中央に位置する山。釈迦（しゃか）が無量寿経（むりようじゆきよう）や法華経（ほけきよう）を説いたとされる山として知られる。

2 持明仙（ぢみようせん） 呪（まじない）をよくし、その験力を身に付けた仙人

3 中前正志『法道仙人の進出』『説話論集第五集 仏教と説話』清文堂出版 一九九六年



法道上人倚像

像高一一六・〇

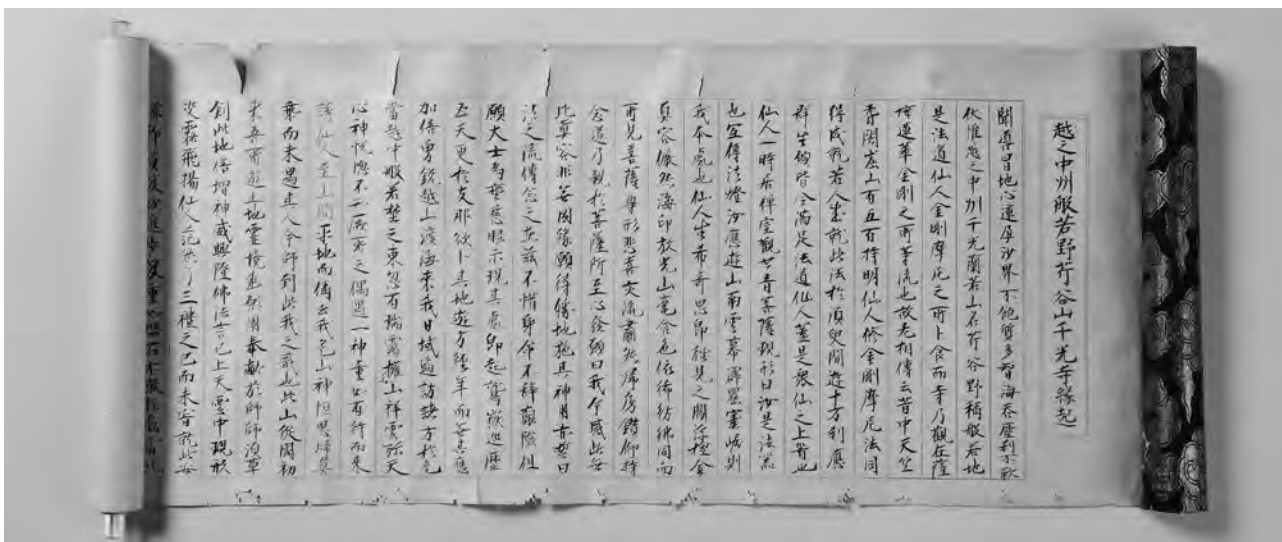
横幅五五・〇

奥行三六・〇（総高一三〇・〇）

本像は現在千光寺観音堂内の奥の堂に安置されている。千光寺で保存されている文書から江戸時代の後期に制作されたものであることがわかる。

本像は、曲^{きまづ}袂^{たもと}に腰かけて法衣に袈^け裟^さをかけ、足元に木履を置く、一見、禪宗の祖師^{そしぞう}像のようである。しかしながら、耳が大きく、あごひげをたくわえ、頭部後方で髻^{まげ}を結う中国風な翁のような像容である点に、人間である祖師ではない「仙人」の風貌^{ふうぼう}がうかがえる。

体の前面に両手で持つものは如意である。これを用いれば手の届かぬ背中のかゆい所も意の如くなるところから名付けられたとされる。（Y）



千光寺縁起

享保十一年（一七二六）

紙本墨書

縦三二・〇 横五六五・〇

千光寺では、享保十二年（一七二七）に九九年ぶりの御開帳が行われているが、その御開帳に合わせて作成されたのが本縁起である。この縁起は、当時の住職である五八世正遍が、さまざまな書物から得た知識や漢籍の素養を駆使して作った、非常に格調高い文章である。原文は漢字だけの白文であるが、金子容士氏の解説により、以下に概要を紹介する。

一、天竺（インド）で修業を積み金剛摩尼の法をおさめた法道仙人が仏法を広めるために中国・朝鮮を経て日本へやってきた。

二、法道仙人が般若野まで来ると、山神である童が現れ、この地に仏法を広めてほしいと言った。仙人は、背に負ってきた観音像をおろしていたのを再び背負おうとすると急に重くなり動くことができなくなった。時に、白瀧に明王が出現し、蓮華谷に金蓮が生えた。仙人は、これぞ仏縁の地と喜び、ここに庵を結んだ。仙人はこの谷に生える香芹を食したので、この地を「芹谷」という。

三、法道仙人は常に鉢を飛ばして布施を受けていた。ある日、海を通る船が見えたので、その船に鉢を飛ばして食を乞うた。ところが、船頭は「都へ届ける官米であるから」と断った。すると鉢だけでなく、鉢に続いて船中の米が雁の列のように飛び去った。船頭はあわてて米俵を追って仙人の前へ来て非礼をわびた。すると米俵はまた前のごとく雁を連ねるようにして船中へもどった。一つだけ落ちたところが米島（現高岡市米島）である。

このような記述の後、法道仙人のさまざまな徳や放生津八幡（現射水市）での放生会の始まり・越の四傑と呼ばれる仙人の門生・芹谷山五社（現在の八幡社）や五行説、千光寺歴代・本尊の盗難・長尾景虎・前田利長のことなどが記されている。

この縁起は享保十一年に一応まとめられたが、その後の享保十二年に実施された御開帳のことを追記して、最終的には享保十四年の年記銘になっている。（Y）

（注）この縁起は千光寺五八世正遍の編集であることは明らかであったが、歴代住職の事柄は五三世善遍の代で終わっており、あとは白紙の部分が一メートルほど残されていた。このことから未完であると推定されていたが、平成七年から行われてきた千光寺文書調査の際に、金子容士（窓大）氏によってその後に続けるべき文の草稿が発見され、それにより本縁起が編纂された目的や編纂にかかわった人々の名も明らかになった。平成十二年に、金子氏によって「補遺」として本縁起に追記された。

一、貞享二年（1685） 寺社由緒書上 開闢は「唐僧円徳上人」

一 并谷十光寺開闢者大寶三年唐僧円徳上人建立

主當歳九百八十五年罷成候本尊正観音秘佛而書

二、宝永元年（1704） 由来書控 開山は「唐僧円徳上人」

一書開闢者唐僧円徳上人建立
是之師持正撰者全書と云す

三、享保十二年（1727） 千光寺略縁起（木版） 「天竺の沙門円徳上人法道仙人」

千光寺の由縁上人曰く代々武蔵の所守大寶三年より父の代より上人仙入願字上人の正観音とす一の寺を修めしむるはこれに
是の三朝の由縁上人の正観音とす一の寺を修めしむるはこれに

四、寛延二年（1749） 千光寺由来書控 開山は、法道仙人を消して「唐僧円徳上人」

寺開闢者法道仙人
天竺持正正観音と云す

五、文化三年（1806） 千光寺由来書控 「法道」と「上人」の間に「円徳」を入れる

寺開闢者 文武天皇御宇大寶三年
中天竺五百持明仙之上首法道仙人
関闢自尔已来歴代も今相續す

史料 年代別由緒書による千光寺の開基

千光寺には江戸時代の縁起は数種あるが、法道仙人が千光寺の開基として初めて登場するのが享保十一年の前記「越之中州般若野芹谷山千光寺縁起」であり、それを最も端的にまとめているのが享保十二年の木版「略縁起」（上記三の画像）である。

縁起の中ではもともと古い貞享二年（一六八五）に加賀藩に提出された由緒書には「大宝三年唐僧円徳上人建立」（上記一）とある。それが、享保十二年「略縁起」では「天竺の沙門円徳上人^{法道}」（上記三）となる。その後の数種の縁起の中で「法道仙人」となったり「円徳上人」「法道上人」「法道円徳上人」となったりが、明治年代には「法道円徳上人」に統一されたようである。

現在の千光寺では「渡来僧の円徳法道上人」とされている。（Y）

円徳上人について

貞享の由緒書にある「円徳上人」についてどのような人物であるのか長い間わからずにいたが、このほど富山大学人文学部教授の鈴木景二氏から次のようなご教示をいただいた。

宝龜七年（七七六）の「東大寺六宗未決義」（『大日本仏教全書』）に、「小学頭満位僧 円徳」とある。

千光寺の開基とされる「円徳」と同一人物であるかどうか全くわからないが、東大寺の中ぐらゐの位の僧円徳が莊園のある砺波にやってきて、千光寺のもとになるような宗教活動を行った可能性も全くゼロではない。もしそうなら、その記憶が長い間伝承され、江戸時代になって加賀藩に書き上げられた千光寺の縁起に痕跡を残したという想定もありうる。（Y）

千光寺の書跡



秀吉禁制

天正十八年（一五九〇）

紙本墨書 一面

縦四四・五 横六五・〇

禁制

一、軍勢甲乙人等乱妨狼藉事

一、放火事

一、対地下人百姓非分之儀申懸事

右条々堅令停止訖、若於違犯之

輩者、忽可被処嚴科者也

天正十八年七月 日（朱印）

天正十三年（一五八五）豊臣秀吉は

前田利家を先陣とする十万の大軍を越

中に派遣し、佐々成政を討伐した。そ

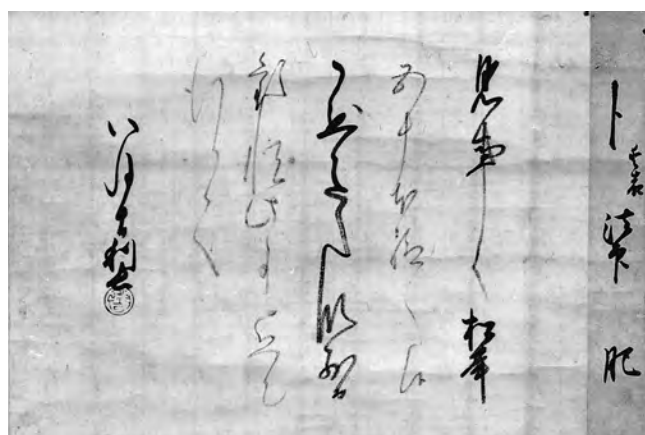
の道中、秀吉は芹谷野を越えた。

この禁制はその五年後、小田原征伐

の最終段階に発給されたものであり、

秀吉は全国各地に同様の禁制を多数発

給している。（Nd）



前田利長公消息

八月十日

紙本墨書 一幅

縦三五・七 横五二・〇

法印 肥

見事之松茸

五十本給之候

御懇意之段別而

欽悦此事候

恐々謹言

八月十日 利長（印）

金沢の愛宕善性院住職を兼ねていた

千光寺第五十一世有遍への松茸五十

本に対する礼状。善性院は慶長四年

（二五九九）に利長が金沢城に移った際

に興した寺で、のちに明王院と改称さ

れ、藩内の真言宗の触頭となつた。触

頭とは、寺社奉行の触れを配下の寺社

へ伝達し、配下寺社の訴願等を奉行に

取り次ぐ役目。（Nd）

見本

前田利長公消息

十一月二十八日

紙本墨書 一幅

縦三五・七 横五二・〇

(切封) あたし
法印 肥前守
御報

我ら為虫氣被御祈禱
御札巻数御三寸給之候
被入御念之段誠以大慶
至極存候 氣力加驗ニ而
可被心得候 恐々謹言

十一月廿八日 利長 (花押)

病氣平癒の祈禱に対する礼状。利長は高岡城に入城した慶長十四年(二六〇九)に癰(悪性の腫れ物)を煩い、翌年には利光(のちの利常)が越中の埴生八幡宮・安居寺、加賀の敷地天神社などに病氣平癒の祈願をしている。その後、利長は慶長十九年(二六一四)に没する。(Nd)



前田利長公消息

十二月二十四日

紙本墨書 一幅

縦三五・七 横五二・〇

(切封) 愛宕等
法印 肥前守

為歳暮之御祝儀
巻数并樽一荷昆布
三束給之候 御懇
意之段目出令満足候
恐々謹言

極月廿四日 利長 (印)

寺からの歳暮に対する礼状。經典や酒樽、昆布をもらって利長が上機嫌だった様子が伝わってくる。(Nd)



見本

千光寺の古書 概要と特徴

氷見市立図書館・氷見市史資料整理室 森越 博

1. 古書とは

古書ということばは、一般にかなり混乱した使い方がされている。正しく定義された専門用語と、日常語との間にやや隔たりがあり、たとえば古本とどう違うか問われて、きちんと答えられる人はまれだろう。

ここでいう古書とは、おおむね和紙等を袋とじにし、表紙を付け、糸で製本した書籍をさす（他にも巻物や折本など、様々な形態の古書がある）。新刊書が使用済になっただけの古本とは、まったく意味が異なる。

近年になって、近世・近代に刊行された、古書に対する評価が変わってきた。

従来たいせつに扱われてきた、中世以前の古書は、地方にわずかしかなかった。身近にある古書のほとんどは、江戸時代以降のものだろう。昭和の中頃から、これらがふだん手に取られなくなり、ずっと死蔵されたあげく、汚い本として廃棄されてきた。

それが最近では、一部の貴重書だけでなく、ありきたりな古書も含めすべてが重要な文化遺産である、という考え方が浸透してきた。地域に伝存している古書も、その土地の歴史や文化を物語るたいせつな史料として、認知されつつある。

こうした古書が千光寺には、およそ六〇〇〇冊以上所蔵されており、現時点で富山県内において、他にほとんど例がない。

千光寺で所蔵する古書について、その概要と特徴を紹介すると次のようになる。

2. 蔵書の概要

①所蔵状況

古書を一冊毎に封筒へ入れ、数一〇冊を整理用の段ボール箱に収め、スチールラックに配架している（一部の古書は封筒に入っておらず、段ボール箱に収めて保管）。

②古書の数量

およそ六〇〇〇冊以上の、江戸から明治時代にわたる古書を所蔵する。

旧蔵分（土蔵に保管） 段ボール箱約一七〇個 推定五一〇〇冊

新蔵分（平成一九年に米蔵で発見） 段ボール箱約三〇個 推定

九〇〇冊

※段ボール箱一個に、三〇冊ほど収まるものとして推計した。

③古書の内容

全体のおよそ三割が真言宗、三割が仏教一般で、残りが和書・漢籍という蔵書構成になっている。富山県関係の地域資料も、多数含まれる。

3. 蔵書の特徴

①富山県内寺院で有数の蔵書量

通常の寺院では、古書が遺っていても一〇〇〇冊未満であり、多くて三〇〇〇冊程度しかない。千光寺にはその倍以上の蔵書があり、県内でいまのところ類がない。

②真言宗関係書を系統的に保存

密教の主要な經典から、インド・中国の論書・注釈書や、空海の著書までが、系統的に揃っている。真言宗に関する基本的な学問が、ここで修められるようになっていく。

③和書・漢籍も多数伝存

一般に寺院の蔵書では、外典とされる和書・漢籍が少ない。千光

見本

寺ではこうした分野の書籍でも、基本的なものは所蔵されており、蔵書構成のバランスが優れている。

④行遍編『寛政四年 般若台書籍目録』『金橋山 書籍目録』

千光寺六四世住職の行遍は、氷見の金橋山・千手寺から入寺した。近世中頃における、両寺の蔵書構成が判明する、貴重な目録が遺されている。

⑤孤本の空遍著『禅客鸞徒破会評決』（4. ①参照）

孤本とは唯一その本文を伝える本のこと。『禅客鸞徒破会評決』は、全国でこの一冊しか確認されていない。

⑥古活字本の『法華三大部私記』（4. ②参照）

古活字本とは、文禄・慶長から寛永頃のおよそ五〇年間に、木活字などを用いて出版された刊本のこと。高参寺の『無量寿経論註記』（南砺市指定文化財）以外、ほとんど県内には伝わっていない。

⑦稀観本の『地藏菩薩応驗新記』（4. ③参照）

稀観本とは世間に流布していない珍しい本のこと。『地藏菩薩応驗新記』（全六冊）の完本は、いま他に高野山大学図書館のみが所蔵している。

4. 貴重書

①空遍著『禅客鸞徒破会評決』上巻（下巻は欠本か？）

千光寺五六世住職の空遍が、禅宗や真宗の教義を批判したもの。氷見・円満寺住職の義教（浄土真宗本願寺派第五代能化）が、『浄土真宗論客編』を著す発端になった。

②『法華三大部私記』全三〇巻

証真撰『法華玄義私記』『法華疏私記』『止観私記』の総称。天台大師智顗が『法華経』について講義した、『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』の注釈書。慶長頃に刊行された、古活字本と考えられる。

③『地藏菩薩応驗新記』全三巻六冊

金沢・高巖寺（臨済宗妙心寺派）の元住職・普門元照が晩年に編纂して、宝永元年に刊行した地藏菩薩の靈驗記。伝本が稀少で、加賀を中心に全国の説話が収められており、越中の記事も四話見える（『仏教説話集成』二 叢書江戸文庫四四 国書刊行会1998所収）。

5. まとめ

今日くずし字や漢文を読める人が、少なくなった。同時に古書などの取り扱い方を身につけている人も少なく、各地域で古書整理を行うのが困難になっている。

古書の整理にはかなり専門的な技術が必要で、古文書と同じ方法は通用しない。古書には大別して、刊本と写本がある。刊本は印刷物だから、古文書より整理が容易などということは決してない。まったく内容も姿形も同じ書籍はまず見あたらず、各々どう違うかよく注意しながら、規則に従い正しく目録を記述しなければならない。また写本は形態がまちまちで、古文書との境界がはっきりしないものも多く、それはそれで扱いに苦慮する。

こうしたことが一般にあまり理解されておらず、地域の事情に応じた方法を確立して、分かりやすくまとめておく必要がある。

千光寺の古書整理作業は、平成七年に着手され、一時中断の後、平成一三年から再開された。この間も数年休止しており、いまだに完成されていない。

しかしながら実際の整理作業を通し、富山県内の寺院で古書を整理する、ノウハウが蓄積された。その成果もハンドブックの形で、公表されている（『加越能 古書整理の手引』氷見市史資料整理室2012）。ゴールはすでに視野へ入り、もう一息の段階にきている。

千光寺の古書は質・量ともに県内有数の貴重な文化遺産であり、今後着実に整理作業を実施し、できるだけ早い時期に完遂して、ひろく公開することが望まれる。



法華三大部私記

古書（古活字本）

（各）縦二五・七 横一八・二

私記^{しき}とは私人の記録、ひそかな記述、自分の著述などを謙遜^{けんそん}した言い方。

法華三大部私記とは、『法華玄義私記』

『法華疏私記』『止観私記』の総称である。

古活字本*とも推定される。栗皮の表

紙で（柿渋）装丁された、高級できわ

めて貴重な書物である。（Mt）

古活字本（こかつじばん）*文禄（二五九二〜一五九六）から慶安（一六四八〜一六五二）年間に刊行された活字本。銅活字本はきわめて少なく、ほとんど木活字本。慶長勅版本・伏見版（銅活字）・嵯峨本など。



禅客鸞徒破会評決

古書（孤本）

縦二五・七 横一八・二

空遍著。浄土真宗本願寺派第五代能化^{のうげ}であった義教が『浄土真宗論客編』^{さんこうくわん}を著す発端になったもので、三業惑乱^{さんごうくわん}より以前の江戸時代に、大論争となった。

これは上巻であり、続編が編まれてあったものと思われる。（Mt）



地藏菩薩応驗新記

古書（稀観本）

（各）縦二五・七 横一八・二

普門元照著（元禄十五年刊）で全六冊ある。北陸・近江を中心とする地藏菩薩に関する縁起が記されている。氷見市上日寺地藏尊靈験の事と餅食い地藏、同市宇波の地藏尊、富山市寒江の自得寺の石地藏、射水市津幡江の橋地藏のことなど越中の地藏菩薩のことも記載されている。（Ot）



大般若経を納めた大函

大般若経 六百卷

折本、大函十二納 一式
(各) 縦二七・七 横八・五

大般若経は詳しくは「大般若波羅密多経」といい、玄奘の訳による六百巻に及ぶ最大の仏典である。般若波羅密(智慧・到彼岸)の義を説く諸経典を集大成したもの。般若(智慧)の立場から、一切の存在はすべて空であるという空観思想を説く。(Mt)

般若台書籍目録

紙本墨書 一冊

縦二五・七 横一八・二



『北越東嶺芹溪山般若台書籍目録』。寛政四年(一七九二)、六四世行遍の編集になる。寛政四年時の千光寺が所蔵する書籍目録である。仏典二〇九六、儒書・その他三七一、聞き書き九二の合計二五五九部が掲載されている。平成十年三月に「般若台書籍目録」が砺波市教育委員会 砺波郷土資料館土蔵友の会より刊行されている。寺名は千光眼寺せんこうげんじとなっている。(Mt)

見本

千光寺の伽藍配置図

吉水友香

《観音堂》本尊の観世音菩薩を尊とする建物で、一八一九（文政二）年に井波大工の二代目松井平恒が建立した。複雑で華麗な屋根、棧唐土などの建具、波龍や竹虎、獅子の精緻な彫刻など見ごたえ十分。隣には閻魔堂がある。

稲荷堂

鐘楼堂

山門

地藏堂

観音堂

御幸門

閻魔堂

客殿

土蔵

書院

寺標

六体地藏

《土蔵》一七八五（天明五年）築の西蔵で、一八六二（文久二）年築の東蔵の二戸で一棟となっている。明治四二（一九〇九）年に小杉町の左尾竹内源治が譲り直し、全面に大胆な縁起が描かれた。座敷からのみ見学可。

《御幸門 みゆきもん》高岡市の国主瑞龍寺の表門を明治五年に移築したもの。「間業医門（いつげんやくいもん）」と呼ばれる形式で、この形式の門としては北陸最古と見做す。

三十三ヶ所観音

《山門》一七九八（寛政九）年に井波大工の柴田清右衛門が建立した禅宗様山門の二階一重門。この形式の門は、富山県内では瑞泉寺、瑞龍寺、善徳寺と千光寺の四ヶ所だけで、そのうち千光寺の山門が県内最古。保存状態も良く、江戸後期の遺構として貴重。参道の石積みも貴重。

シヨウジヨウバカマと千光寺さん

砺波市美術館館長 小野田裕司

平成二十四年六月、石丸正運相談役を交えて学芸会議を開く中、学芸員から一度千光寺を企画展で取り上げてみたいと提案があった。末永学芸員と安念道雄住職を訪ねたのは、八月蟬しぐれの中の千光寺であった。住職と末永学芸員は高校の同級生で、二人とも私が教員をしていたころの生徒さんである。

「千光寺さん」は、団塊の世代であるわたしたちにとって、砺波のデートスポットの一つであり、交通手段はバスであった。千光寺の展望台まで、当時は境内からの山道を歩いていたが、今は近くまで車道がついている。春にはシヨウジヨウバカマやキクザキイチゲなどを見ることができる。平成二十五年六月の千光寺展実行委員会準備委員会でそんな話をする、実行委員長である尾田武雄さんから、その程度の認識で千光寺展に向かうのはやや心もとないから、勉強会を重ねようということになった。七月の第一回のワーキンググループの勉強会は尾田さんの案内で千光寺探訪となった。その後、同寺の安念道雄第七十六代住職、日照院系数寛宏住職、氷見市立図書館氷見市史資料整理室森越博さん、帝塚山大学准教授杉崎貴英先生などを招いて研修が続けてきた。

その間、平成二十五年九月には「千光寺の文化財を守る会」秋季研修旅行に合わせて、千光寺仁王像の修復がなされている大津市の園城寺佛教尊像修復院の現場を訪れた。案内は石丸相談役で、ここで川口圭太仏師との出会いがあった。台の上には仁王様の頭がおか

れ、細かい部材が棚に整理されていた。漆が使われているのは土地柄でしようかとの川口さんの感想も聞かれた。汐美饅頭で有名な藤屋内匠の大津画落雁を土産に買った。

勉強会を重ねていた今年七月、長崎県佐世保市で、高校一年の女子生徒が同級生を殺害した容疑で逮捕される事件が起きた。

「なぜ人を殺してはいけないのか。」宗教学者の山折哲雄さんは新聞にこんな論評を載せていた。「人を殺すことは、人間の存在を根本から脅かす行為で、当然に許されない。だが、人を殺しうる人間がいくらそう説いても、説得力はない。だから人類は、神や仏など宗教的な存在への信仰を後ろ盾に主張してきた。殺すなかれ、と。今や我々日本人は、その後ろ盾を失った。・・・時代の流れの中で、人知を超える存在が失われた結果、我々は人間を理解したと錯覚した。・・・人間は社会的に、科学的に理解できるものだ、という傲慢さが透けて見える。しかし、人間はそんな薄っぺらな存在ではない。・・・我々は、内なる闇を抱えた存在なのだ。」

このたびは、砺波郷土資料館、となみ散居村ミュージアムそして砺波市美術館の三館共同企画として、砺波市合併十周年記念「千光寺展」を開催することとなった。多くの皆様に足を運んでいただき、「なぜ人を殺してはいけないのか。」この重い問いを今一度考える機会になればと思う。

千光寺の四季

●三月二十一日 涅槃会



参拝者に涅槃団子をふるまう日照院系数寛宏住職



早朝より檀家の女性たちが支度のために集う



フォトクラブとなみ野



●八月十日 四万六千日・せがき法要



風薫る季節。稲荷堂そばに石楠花が咲き誇る

千光寺の年間行事

一月元旦・二日・三日 はつもうで 初詣

新年にはじめて社寺へお参りすること。はつまいり。
千光寺では正月三日を初詣としている。

三月二十一日 ねはんえ 涅槃会・しょうみえくよう 正御影供養

釈尊入滅の陰暦二月（今は三月）十五日、釈尊の遺徳奉讃追慕のために修する。涅槃図を掲げ
遺教経を讀誦する。千光寺では三月二十一日に正御影供養とともに行われる。

八月十日 しまんろくせんにち 四万六千日・せがきほうよう 施餓鬼法要

四万六千日はこの日に参詣すれば四万六千日参詣したと同じ功德があるという縁日。
施餓鬼法要。飢餓に苦しんで災いをなす鬼衆や無縁の亡者の霊に飲食を施す。

十月二十六日 おつみょうえ 仏名会

三世の諸仏の仏名を唱えてその年の罪障を懺悔し消滅を祈る法会。

松岡達子（上も）

声明をとる安念道雄住職

川堰あけみ





堂内の緑に映える観音像



●十月二十六日 仏名会

流れるようなラインを描く客殿の屋根



客殿の見事なアーチ



山門をくぐる若者たち



鐘樓堂から観音堂を望む

(上段左) 山本秀一 (右) 山崎裕子
(中段左) 藤井建二 (中) (右) 山本秀一
(下段) 山本秀一

見本



昭和天皇・皇后両陛下のお通りになった御幸門



参道にて。七福神めぐりののぼり旗が立つ



● 一月元旦二日三日 初詣

「樹間こしにのぞむ山門。雪とのコントラストが美しい」



早朝のひとつま



初詣のようす



雪の降る中、参詣する人の影

見本

川堰あけみ（4点とも）

癒しと観光、開かれた学習の場

癒しと観光の寺院千光寺

砺波市文化財保護審議会委員 尾田武雄

国道三五九号線から真言宗の古刹芹谷山千光寺に入ると、小さなお堂の六地藏に迎えられ、ずらりと並んだ西国三十三カ所観音に真摯な気持ちになり、心が引き締まる。右手に元千光寺があったとされる蓮華谷を眺め、前方には明治の名工藤井助之丞が作成した地藏堂がある。山門前の両脇のやはり助之丞が請け負った「ハ積」と言われる石垣が綺麗な姿を見せている。山門を抜けようとすると、両脇に立像と坐像の地藏菩薩が露座のまま居られる。「不許葷酒入山門」と彫られた結界石は井波石工善太郎の作である。寛政九年に井波大工の柴田清右衛門により建立された山門からは、屋根が流麗な観音堂が見える。堂々たる石積み、観音堂の後ろには増山杉の寺叢に圧倒される。

右脇の現代の名工白井大工の手による鐘楼堂、階段を上がると左に「越中富山住人 大石工佐伯伝右衛門」作の宝篋印塔が鎮座している。観音堂は井波宮大工の名工、二代目松井角平による。

観音堂と本堂を結ぶ回廊の中心部に閻魔堂があり、十王像が安置されているが、これは越中高岡の仏師山本喜兵衛作である。土蔵の外壁は小杉町の竹内左官によって塗り直され、明治四十二年に完成し、全面に鍍絵が描かれ、腰壁や土扉の大柄な鶴亀・恵比須・大黒の招福図や、外壁妻面の和洋折衷の大胆な意匠は、県下を代表する優品である。また新座敷と称される書院は銘木を多用し、華美に走らず洗練されたデザインで質の高い造りで、藤井助之丞作である。

現在整理中の、古書籍は真言宗などの仏教書、漢籍など六千冊を保管され、その量と質は卓越しており貴重である。古文書は総数四〇九四点が砺波郷土資料館で整理され『砺波市歴史資料調査報告

書―千光寺文書―』（平成一四年発刊）が上梓されている。年中行事の涅槃会や正御影供養、四万六千日、施餓鬼法要、仏名会などが行われている。千光寺の多くの有形無形の文化財が市民に開放され活用されることは有意義なことである。生涯学習の場として、利活用されることが市民に課せられた課題だろうと思われる。

千光寺の寺内に入ることによって、心忙しい現代人が癒しと豊かさを感じるのは、大宝三年（七〇三）から続く長い宗教空間が醸し出す世界があるからだろう。二十一世紀はまさに心の時代なのである。今日、日本は観光立国を目指しているが、観光は単なる見物や見学ではなく、観光の語源である中国の古典『易経』の「国の光を観る」ことである。きらきら輝く本物を確認することが重要である。その点この千光寺は偽りのない文化財に満ちており、市民の宝として誇りにすべきものがある。それを知り、愛することが観光である。そういえば、武蔵野美術大学名誉教授の日本画家故前田常作氏の「芹谷山千光寺・観音の光」の作品がある。千光寺の観光は、「観音の光」そのものかもしれない。



開かれた密教の古刹千光寺

高野山真言宗の芹谷山千光寺の本格的な寺誌が発刊されたのが、昭和三十二年八月の名越仁風著『芹谷山千光寺略史』である。その後数点の写真を加え同年四十四年五月に『千光寺誌』として再版されている。五十六年に絹本著色大威徳明王図と絹本著色両界曼荼羅図が富山県指定文化財となり、四十年には銅造観世音菩薩立像が同じく県指定文化財となっている。四十四年五月には頼成の森で全国植樹祭が開催され、昭和天皇、皇后両陛下がご臨席され、当寺でご休憩された。平成三年には両陛下の通られた御幸門が、市指定文化財となる。これは高岡瑞龍寺から明治五年に移築されたものである。

平成五年十月には、高岡市立博物館で「越中古寺の至宝 千光寺の文化財」展がおこなわれ、多くの寺宝が世に紹介された。期を同じくして同年には、「芹谷山千光寺大調査」が砺波郷土資料館土蔵の会（NPO法人砺波土蔵の会の前身）で始まった。会員で考古学者西井龍儀氏を中心に寺内の測量調査が行なわれ、千光寺前の芹谷下大門遺跡から十二世紀の祭祀用品が表採され、日宮跡からは大量の古銭の宗銭が確認され、金比羅山では八世紀頃の須恵器、土師器破片を表採されている。

平成六年には植物や野鳥学者故林梅夫氏が植生など自然環境を調査され、同年には日本石仏協合理事平井一雄氏や尾田武雄による石造物調査が行われた。翌年七年七月には、砺波市文化会館にて「千光寺調査中間報告会」が開かれ、平成十年三月には砺波市教育委員会とともに『般若台書籍目録（寛政四年）』が発刊された。同年十一月十一日と十二日には、金子宰大先生と公文書館新田二郎先生等と共に古文書・書籍調査を始め、十二月には『土蔵』八号で「芹谷山

千光寺調査中間報告」を発刊した。

平成十二年十二月には、千光寺山門と書院が砺波市指定文化財に認定され、翌十三年四月からは氷見市立図書館司書森越博氏の指導で古書籍調査を充実し、十四年三月には、砺波郷土資料館の協力で『千光寺文書目録』を発刊し、砺波郷土資料館では「芹谷山千光寺の方丈さんたち」の特別展が開催された。平成十五年四月五日には「千光寺文化財を守る会」が結成された。平成十七年、千光寺の土蔵が「富山の土蔵百選」に選ばれ、四年後の二十一年には、千光寺土蔵と天明五年棟札を附として市指定文化財になっている。二十三年一月に千光寺道標石塔が砺波市ふるさと文化財に指定される。この間、十八年五月四日と五日には、千光寺の本尊聖観世音菩薩の御開帳、七十六世住職道雄師繼承法要が厳修されている。

県指定文化財が三点、市指定文化財が五点、市のふるさと文化財一点が保持されている。ほかにも本堂、回廊、地藏堂、古書籍、古文書、石垣、石造物、寺叢など多くの貴重な文化財があり、県民や市民の誇り得る大事な宝物としてこれからも維持していかなければならない。

石造 弘法大師坐像

笏谷石 一軀

高さ 四一・〇 横二七・〇

福井県足羽山から採掘される緑色凝灰岩の笏谷石製の弘法大師である。右手に五鈷杵を握り、左手に念珠を持ち、そして坐すスタイルの厚肉彫りで貴重な石仏である。左に「高野山三和院謹疏 微雲管中現在照覧内院周徧影即真」右に「文政十一戊子大梁於妙聡持 擬一千遠忌分布千影」とある。つまり弘法大師の一千遠忌の際に、高野山三和院が一千体の像を作成し配布したのであると思われる。(Ot)



千光寺・観音の光

前田常作

平成十八年（二〇〇六）

リトグラフ 額 一面

縦五三・五 横三九・五

曼荼羅の画家として知られる前田常作（一九二六―二〇〇七）の遺作である。富山県入善町に生まれ、富山師範学校を経て武蔵野美術学校西洋科に学び、一九五七年に第一回アジア青年美術家展で大賞のバリ留学賞、国際美術家賞を受賞されている。一九九二年には紫綬褒章を受けられ、その二年後の一九九四年には母校である武蔵野美術大学長に就任されておられる。観音霊場シリーズに挑戦され、百観音の絵画を完成されている。

本画は、平成十八年五月四日五日の両日、芹谷山千光寺の銅造観世音菩薩が三十三年に一度の開扉法要の慶事を記念して制作された版画作品で、十七版二十八度刷りにより仕上げられている。(Ot)





五智如来像

木造金箔 五軀

(各) 幅 六五・〇〇〜七五・〇

奥行五五・〇〇〜七五・〇

高さ一二〇・〇〇〜一四五・〇

千光寺の現在の本堂は宝暦元年（一七五一）に建立されているが、その中央に安置されているのが五智如来である。密教で大日如来のそなえる五つの智慧を、五つの如来に当てはめたもので、『金剛頂経』の説く大日如来（中心）、阿閼如来（東方）、宝生如来（南方）、阿弥陀如来（西方）、不空成就如来（北方）、これら金剛界五仏を五智如来と称されている。「金胎不離」の思想に基づき、中央に胎藏界の仏像を安置している。千光寺にとって重要な御本尊である。（Ot）





観世音菩薩立像（前立観音）

木造金箔 一軀
 本体一五・〇 一五・〇 四五・〇
 （台座三〇・〇 三〇・〇 四九・〇）

頭上に宝冠をいただき、その正面に阿弥陀仏をつける。身には条帛・裳をつけ、璎珞等で飾り、蓮華座に立つ。

真言・天台兩宗の密教では、諸尊諸天が多様化し、特に菩薩部の最高位に立つ観音像は多岐にわたる。すべての衆生を救う現世利益の菩薩であり、釈迦が悟りを開く前の姿、つまり古代インドの王

族のみなりを基本とし、豪華な装身具で飾りたてる。平安時代以降、諸種の観音像に対して一面二臂の観音像を聖（正）観音像と称するようになった。本像は、千光寺の前立観音で、同寺の秘仏に似せた立派な仏像である。高い台座を持ち、下部に「釈尼妙樹菩提施主梅檀野村永田又郎」の刻字がある。（Mt）



だいだんぐ しめんき
大壇具・四面器

一具 法具一式

(壇具) 縦一四七・五

横一四七・五

密教寺院では、願いごとなどの成就をはかるため、加持祈祷などの儀式をおこなない、本堂内陣に祭壇を設ける。祭壇には古代インドの生活用具や武器の形から生まれた数々の密教法具が安置され、これを大壇具と称する。これはまた大曼荼羅供ともいわれ、法具のほとんどを用いる本格的な壇具である。他に護摩壇供や密壇具などがある。

密教法具には、杵の形をして、両端に鋭い刃をつけた「金剛杵」や、金剛杵の一方の把手に鈴をつけた形で、鈴音で仏を喜ばせる「金剛鈴」のほか独特の形の法具がある。空海が中国から請来したものに因っており、平安時代以降に発達した。大壇具上の四つの辺に金剛鈴、金剛盤、五鈴杵などを配置したものが四面器である。(Mt)



華鬘

金銅透彫 二具

縦三九・七〜四七・五

横二一・七〜二六・五



華籠

金銅透彫 二具

径二三・五〜二六・五



賓頭盧尊者

木造漆塗 一軀

横幅七二・〇

奥行四七・〇

像高七五・〇



室内の莊嚴具（仏殿内の装飾）の一つ。内陣の長押欄間にかける。元來は生花を連ねて飾り、仏を供養したが、のちに恒久的な装具として作られるようになる。

平安時代以降は団扇形となり、これは金銅板に蓮と菊の模様を透彫して、吊金具 総角形 垂飾をさげる。中央に劍梅鉢紋が配され、加賀藩と千光寺

の関係を知ることができる。ほかに牛皮 木 玉 布などで作られたものもある。

華籠は、散華に用いられる花を入れる器。散華とは、紙製の五色の蓮華の花弁をまき散らす法会のこと、古くは竹製の籠、のち多く金属製の透彫を施した皿形で、下に飾り紐をつける。

(Mt)

賓頭盧尊者はお釈迦さまの正法を伝える十六羅漢の一人で神通力が強い人だったと言われている。病人が自分の患部と同じところを撫でると病気が治るという信仰があり、撫仏とも呼ばれている。

今回展示する賓頭盧尊者は観音堂にあるが、客殿にはかつては尼寺にあった賓頭盧尊者が置かれている。(Oy)

見本

千光寺展ワーキンググループ・経過報告にかえて

砺波市美術館学芸員 末永忠宏

県内の公立美術館では平成五年（一九九三）に高岡市立博物館で「越中古寺の至宝 特別展 千光寺の文化財」が開催されてから二十一年ぶりの千光寺展が砺波市の公立施設三館で開催される。二〇一四年のこの秋、県内では砺波市出身の洋画家藤森兼明氏の大々的な展覧会が富山県立近代美術館、西田美術館、富山大和で開催される。ささやかながら当館でも金沢美術工芸大学に蔵されるアーカイブより、氏のデッサン十五点を陳列する計画である。密教美術を多数蔵する、開基より一三一年の歴史を有する古刹千光寺と、テーマ性を絵の根幹に、清麗な人物とビザンチン聖者を据えた宗教画を旨とする砺波市出身の洋画家。平成二十六年の秋は砺波ゆかりの美を堪能する年として記憶されるのではないか。美術館に勤める者としてそんな期待も抱かせるのである。

ところで、本展「越中真言の古刹 芹谷山 千光寺展」であるが、砺波郷土資料館、となく散居村ミュージアム、砺波市美術館と三館共同企画展として開催される。これは本展が最初ではない。これら三館で二〇一〇年十一月に「砺波の真宗風土」展で同じ方式で行っている。従来行ったワーキンググループ方式で展覧会を進めた。ワーキンググループとは簡単にいえば実働班といえようか。それぞれの美術館の得意とする分野や蓄積を効果的にするために小西竹文館長（当時）により考えられた。枠組みの異なる三館ではあるが、千光寺展を成功させようという動機は一つであり、ゆえに実現はスムーズだった。砺波市合併一〇周年を記念して開催できたことは時の巡りあわせとはいえ真に喜ばしい。

展覧会のきっかけは前述の「真宗風土」展の成果が弾みとなった。二〇一一年四月の反省会で、飯田敏雄実行委員長はじめ大方のメンバーの好評の声にそれは示された。またその席上「千光寺展」が開

催できたらという要望もあった。その後、各施設で人事異動があるなど、メンバーに多少の変化があったが、四年後こうして開催の運びとなった。

ワーキング自体は二〇一二年に検討委員会を立ち上げているので実に二年に亘り、一〇回余りのワーキングを行った。内容としては、小野田館長が言及されているように勉強会で、白状すれば、学の不足している小生のような者に差し伸べられた思いやりだったのだが、千光寺を学ぶための基礎伝授というものだった。尾田武雄千光寺展実行委員長、そしてメンバーからの推薦を受けたさまざまな分野の専門家を招聘してミニ・レクチャーを賜った。レクチャーは一時間程度、その後、講師とメンバーによるブレインストーミング。砺波土蔵の会で鍛えられた方も多数メンバーに加わっていらして、会話から滲み出るその博識に舌をまき、一言一句を書き留めようと用意してあったレジュメは幾度もメモ書きでまっ黒となった。ある時、ICレコーダーで録音すればいいのでは、とも考えたが、録音が気になって話の勢いが削がれると感じ取ってしなかった。メモを起こすなどして自主勉強。果たして少しは追い付けたであろうか。

講師の方々の話ほどの話も興味深く、いずれも眼から鱗が落ちる連続であった。ほんのささやかな菓子折りのお礼では割に合わぬぐらいで恐縮している。それを支えたのはメンバーの熱気であろうか。皆さんの熱気に援け^{たす}られた格好である。



経過報告

平成二十四年

六月二十八日 砺波市美術館で千光寺展を立案、学芸会議で承認を得る
八月 九日 千光寺を訪問、平成二十六年度企画展として開催を打診

十一月 六日 千光寺・仁王像解体修復のため園城寺へ輸送、
(小野田館長・末永)

五月 千光寺を訪問、平成二十六年十一月開催希望を伝える
(当時)

六月 六日 千光寺展実行委員会準備委員会 会場…砺波市美術館
(末永)
出席…尾田、松田、高原、安カ川、白江、小野田、末永
砺波郷土資料館、とнами散居村ミュージアム、当館の三
館共同企画とし、以後、千光寺展ワーキンググループで
定期的に開催を約束

六月十四日 名越仁功さん宅訪問 実行委員の委嘱を願う(小野田・末永)
七月 五日 第一回千光寺展ワーキンググループ
千光寺及び千光寺周辺を探索 尾田武雄氏担当

八月 七日 出席…尾田、松田、渡辺、白江、小野田、末永
第二回千光寺展ワーキンググループを開催
会場…砺波市美術館 第一回ワーキング報告 担当…末永

九月 一日 出席…尾田、渡辺、白江、野原、小野田、末永
フォトクラブとнами野に「千光寺の四季」の撮影を依頼
九月 三日 第三回千光寺展ワーキンググループを開催
会場…砺波市美術館「千光寺について」

九月二十九 三十日 講師…芹谷山千光寺住職 安念道雄師
小野田館長・末永、園城寺(三井寺)にて
修復中の千光寺仁王像を見舞う研修旅行に参加
十月 三日 第四回千光寺展ワーキンググループを開催
会場…砺波市美術館「真言宗について」

十一月十四日 講師…日照院住職 高野山本山布教師 糸数寛宏師
第五回千光寺展ワーキンググループを開催
会場…砺波市美術館「千光寺の縁起とその歴史」
尾田武雄氏

平成二十六年

三月二十五日 第六回千光寺展ワーキンググループ開催
今後の進め方について協議

四月十一日 石丸正運氏と面談

五月三十日 第七回千光寺展ワーキンググループ開催

七月二十五日

千光寺展の概要及び図録編集を協議
第八回千光寺展ワーキンググループ開催
「第三十八回郷土先人展 芹谷山千光寺と法道仙人展」
安カ川恵子氏

八月 四日 第九回千光寺展ワーキンググループ開催
「千光寺の古書 概要と特徴」

講師…氷見市立図書館・氷見市史資料整理室 森越 博氏
第一回千光寺展実行委員会開催

八月 七日 砺波郷土資料館では「第三十八回郷土先人展 芹谷山
千光寺と法道仙人展」、とнами散居村ミュージアムでは
「千光寺の四季写真展」、当館では「砺波市合併一〇周年記念
越中真言の古刹 芹谷山千光寺の至宝」展が提案され、承認
第一〇回千光寺展ワーキンググループ開催
帝塚山大学准教授・杉崎貴英氏を囲む千光寺調査を行う

(一部敬称略)



安念住職、杉崎准教授を囲んで千光寺ワーキンググループ

見本

砺波郷土資料館・となみ散居村ミュージアム・砺波市美術館共同企画展
 越中真言の古刹 芹谷山 千光寺展 出品目録
 砺波市合併10周年記念

番号	指定	分野	名称	作者	時代	制作年	展示会場	材質形状	員数	寸法(センチメートル)	図録掲載頁
	県指	絵画	絹本着色天威徳明王図		鎌倉時代		美	絹本着色	一幅	二六・五六七・五	17
	県指	絵画	絹本着色両界曼荼羅図		室町時代		資	絹本着色	二幅対	(各)八八・六七・四〇	18
	県指	絵画	弘法大師像		室町時代		ミ	絹本着色	一幅	七九〇×四〇〇	25
		絵画	真言八祖像		室町時代			絹本着色	二幅対	(各)九九・五×三八・五	26
		絵画	高野四社明神像		室町時代			絹本着色	一幅	一〇〇〇×四〇〇	27
		絵画	金剛界大日如来坐像					紙本着色	一幅	二二〇×五二二	28
		絵画	不動明王坐像		室町・桃山時代			紙本着色	一幅	三七〇×七四〇	29
		絵画	五大明王像		室町時代			絹本着色	一幅	七三・五×三八〇	30
		絵画	波切不動明王立像					絹本着色	一幅	九〇〇×三七〇	31
		絵画	鉄塔愛染明王像					紙本着色	一幅	一〇五五×四二〇	32
		絵画	三宝大荒神像		室町時代			絹本着色	一幅	九・五五×三六六	33
		絵画	釈迦三尊像					絹本着色	一幅	九三〇×三九四	34
		絵画	釈迦十六善神像					絹本着色	一幅	一〇〇二×五二三	35
		絵画	薬師三尊像					絹本着色	一幅	九六・八×二七九	36
		絵画	阿弥陀三尊来迎図		桃山時代			絹本着色	一幅	八九五×三九〇	37
		絵画	十二天像					絹本着色	十二幅対	(各)九六・〇×三三四	38
		絵画	仏涅槃図					絹本着色	一幅	一八九七×五八〇	39
		絵画	地獄図					絹本着色	二幅対	(各)一七八〇×九六・五	41
		絵画	両界曼荼羅図		江戸時代	嘉永六年(一八五三)		絹本着色	二幅対	(各)二五五・五×四六・五	42
		絵画	敷曼荼羅図					絹本着色	二幅対	(各)二七五×三三〇	44
		絵画	三千仏名		現代	平成十八年(二〇〇六)		絹本着色	一幅	七五〇×五〇・五	72
		彫刻	千光寺・観音の光	前田常作				リトグラフ 額	一面	五三・五×二九五	73
		彫刻	愛染明王坐像					木造彩色色	一軀	像高一八〇 厨子二六・〇×三二・〇×四〇〇	74
		彫刻	増長天立像					木造彩色色	一軀	三〇〇×五五・〇×八五〇	49
		彫刻	多聞天立像					木造彩色色	一軀	三〇〇×五五・〇×九〇〇	50
		彫刻	閻魔王坐像					木彫彩色色	一軀	二〇〇×七五・〇×三三〇	51
		彫刻	法道上人倚像					木造彩色色	一軀	三六〇×五五・〇×二六〇	55
		彫刻	弘法大師坐像		江戸時代	文政十一年(一八二八)		石造	一軀	三〇〇×一五〇×四二〇	72
		彫刻	五智如来像					木造金箔	五軀	(各)六五・〇×七五・〇×五五・〇×七五・〇×二〇〇	74
		彫刻	観世音菩薩立像(前立観音)					木造金箔	一軀	像高二五・〇×五〇×四五・〇 台座三〇・〇×三〇・〇×四九・〇	77
		彫刻	賓頭盧尊者					木造漆塗	一軀	七二・〇×四七・〇×七五・〇	75
		書跡	秀吉禁制		安土桃山時代	天正十八年(一五九〇)		紙本墨書	一面	四四五×六五〇	58
		書跡	前田利長公消息					紙本墨書	三幅	(各)三五七×五二・〇	58
		法具	四面器					密教法具	一式	三三五×六五	59
		法具	華鬘					金銅透彫	二具	三九七×四七・五×二七・二六五	76
		法具	千光寺縁起		江戸時代	文政五年(一八二二)		金銅透彫	二具	径二三・五×二六・五	77
		文書	法華三大部私記		江戸時代	享保十一年(一七二六)		紙本墨書	二具	三二・〇×五八五〇	77
		古書	禪客鸞徒破会評決	空遍				古書(孤本)	二冊	(各)二五七×八二二	62
		古書	地蔵菩薩応驗新記		江戸時代	元禄十五年(一七〇二)		古書(稀観本)	六冊	(各)二五七×八二二	62
		古書	般若台書籍目録		江戸時代	寛政四年(一七九二)		紙本墨書	一冊	二五七×八二二	63
		經典	大般若経 六百卷		現代	平成二十六年(二〇一四)		折本 大函十二納	一式	(各)二七七×八五	63
		写真	千光寺の四季写真	川堰あけみ	現代			カラープリント	二十五点	四五七×五八〇	66
		写真	となみ野 古寺愛歌より	安念余志子	現代	平成二十年(二〇〇八)		カラープリント	十式	四五七×五八〇	66
		考古資料	芹谷下大門遺跡出土遺物					土師器珠洲等	一式	四五七×五八〇	69
		考古資料	芹谷出土の古銭					銅銭	一点		表紙
		計器	伏角計					プラスチック等			

※一部略記した箇所がございます。各会場にて、詳細な目録をご提供いたします



関連年表

天正一十八年	(一五九〇)	豊臣秀吉の朱印状あり
慶長一四年	(一六〇九)	加賀藩二代藩主利長から祈禱札状を受ける
元和三年	(一六一七)	加賀藩、禁制を下す
元和四年	(一六一八)	火災により伽藍什宝焼失
寛永六年	(一六二九)	御開帳
寛永八年	(一六三二)	芹谷村肝煎宅火災により、利長の観音山寄進の文書焼失
正保三年	(一六四〇)	大千代（のちの綱紀）疱瘡について祈禱札状あり
慶安三年	(一六四六)	寄進山拝願の由来を居ける
寛文三年	(一六六三)	観音寄進山の祈願を願ひ出る
天和三年	(一六七六)	梵鐘鑄造
貞享二年	(一六八五)	真言宗の奥義「相承奥旨」を空遍が書写する
貞享四年	(一六八七)	由緒書に寺の開基は円徳とあり
享保二年	(一七二七)	芹谷野用水開削にて寄進山の祈願を願ひ出る
享保三年	(一七二八)	御開帳。縁起に初めて法道の開基とあり
延享元年	(一七四四)	一〇三石余の田地を所持
宝暦二年	(一七六〇)	「観音道」の石塔建立
天明二年	(一七八二)	弘法大師伝記新作成
天明二年	(一七八二)	観音堂建立
天明六年	(一七八六)	六代藩主吉徳妻浄珠院が金燈籠一对寄進
天明六年	(一七八六)	弘法大師九五〇回忌法要
寛政四年	(一七九二)	境内に宝篋印塔建立
寛政四年	(一七九二)	書籍目録作成
寛政九年	(一七九七)	山門建立、十六羅漢安置
寛政九年	(一七九七)	金屋岩黒村に不吹堂造立
文化七年	(一八一〇)	十一代藩主治脩妻法梁院が袈裟を寄進
文化八年	(一八一五)	観音堂再建
文政二年	(一八二五)	拝願山と周辺村の領地を明確にするための絵図を作成
天保二年	(一八四一)	弘法大師七回忌法要
弘化二年	(一八四五)	御開帳
嘉永二年	(一八五五)	御開帳
嘉永二年	(一八五五)	観音堂屋根改修
慶応二年	(一八六六)	神仏分離により、八幡社・五社権現を
明治二年	(一八六九)	芹谷村産土神として村中へ奉遷
明治二年	(一八六九)	芹谷村・徳方村など五か村で八七石余を所持
明治二年	(一八六九)	拝願山が払い下げになり買い入れる
明治二年	(一八六九)	御開帳
明治二年	(一八六九)	什器帳作成
明治二年	(一八六九)	新座敷建築
明治二年	(一八六九)	御開帳
明治二年	(一八六九)	銅造法道像の寄進（のちに戦時供出）
明治二年	(一八六九)	財産引継書作成
明治二年	(一八六九)	山門屋根ふさかえ
大正二年	(一九一三)	御開帳・戦没者大法要
大正二年	(一九一三)	平和観音像建立
昭和二年	(一九二七)	銅造観世音菩薩立像、県指定文化財となる
昭和四年	(一九二九)	植樹祭に昭和天皇・皇后両陛下御休息
昭和四年	(一九二九)	御開帳・梵鐘新鑄
昭和五年	(一九三〇)	千光寺観音堂、県指定文化財となる
昭和五年	(一九三〇)	観音堂改修
昭和五年	(一九三〇)	大威徳明王図・両界曼荼羅図、県指定文化財となる
昭和五年	(一九三〇)	鐘楼堂建立
昭和五年	(一九三〇)	千光寺御幸門、市指定文化財となる
昭和五年	(一九三〇)	客殿屋根落慶法要
昭和五年	(一九三〇)	千光寺山門、書院、市指定文化財となる
昭和五年	(一九三〇)	千光寺土蔵、市指定文化財となる

歴代住職

一世 法道	天竺僧	大正三年（七〇三）開創
二世 智徳	百濟僧	
三世 仙祐	百濟僧	
四世 仙祐	百濟僧	
五世 道勝	百濟僧	
六世 忠雄	百濟僧	
七世 門徳	百濟僧	
八世 実祐	僧都	弘二年六ヶ基より建物の移築
九世 良祐	僧都	
一〇世 心	僧都	
一一世 聖恵	律師	
一二世 定弘	律師	
一三 来賢	律師	
一四世 兼忠	律師	
一五世 兼忠	律師	
一六世 兼忠	律師	
一七世 兼忠	律師	
一八世 兼忠	律師	
一九世 兼忠	律師	
二〇世 兼忠	律師	
二一世 兼忠	律師	
二二世 兼忠	律師	
二三世 兼忠	律師	
二四世 兼忠	律師	
二五世 兼忠	律師	
二六世 兼忠	律師	
二七世 兼忠	律師	
二八世 兼忠	律師	
二九世 兼忠	律師	
三〇世 兼忠	律師	
三一 兼忠	律師	
三二 兼忠	律師	
三三 兼忠	律師	
三四 兼忠	律師	
三五 兼忠	律師	
三六 兼忠	律師	
三七 兼忠	律師	
三八 兼忠	律師	
三九 兼忠	律師	
四〇 兼忠	律師	
四一 兼忠	律師	
四二 兼忠	律師	
四三 兼忠	律師	
四四 兼忠	律師	
四五 兼忠	律師	
四六 兼忠	律師	
四七 兼忠	律師	
四八 兼忠	律師	
四九 兼忠	律師	
五〇 兼忠	律師	
五一 兼忠	律師	
五二 兼忠	律師	
五三 兼忠	律師	
五四 兼忠	律師	
五五 兼忠	律師	
五六 兼忠	律師	
五七 兼忠	律師	
五八 兼忠	律師	
五九 兼忠	律師	
六〇 兼忠	律師	
六一 兼忠	律師	
六二 兼忠	律師	
六三 兼忠	律師	
六四 兼忠	律師	
六五 兼忠	律師	
六六 兼忠	律師	
六七 兼忠	律師	
六八 兼忠	律師	
六九 兼忠	律師	
七〇 兼忠	律師	
七一 兼忠	律師	
七二 兼忠	律師	
七三 兼忠	律師	
七四 兼忠	律師	
七五 兼忠	律師	
七六 兼忠	律師	
七七 兼忠	律師	
七八 兼忠	律師	
七九 兼忠	律師	
八〇 兼忠	律師	
八一 兼忠	律師	
八二 兼忠	律師	
八三 兼忠	律師	
八四 兼忠	律師	
八五 兼忠	律師	
八六 兼忠	律師	
八七 兼忠	律師	
八八 兼忠	律師	
八九 兼忠	律師	
九〇 兼忠	律師	
九一 兼忠	律師	
九二 兼忠	律師	
九三 兼忠	律師	
九四 兼忠	律師	
九五 兼忠	律師	
九六 兼忠	律師	
九七 兼忠	律師	
九八 兼忠	律師	
九九 兼忠	律師	
一〇〇 兼忠	律師	

表 1 千光寺の建造物の年代

No.	建造物	建築年
1	本堂、庫裡	宝暦元年（1751）
2	観音堂	同 10 年（1760）
3	山門	寛政 9 年（1798）
4	土蔵 西蔵	天明 5 年（1785）
	東蔵	文久 2 年（1862）
5	御幸門	明治 5 年（1872）に移築
6	書院	明治 29 年（1896）

※『砺波市の文化財』参照

ろの 1700 ～ 1800 年の間に構築された可能性が指摘できる。

＜空中写真からの検討＞

空中写真で立体視判読をすると、千光寺の周囲は、針葉樹に囲まれ、地形判読は難しい状況であるが、南から伸びる尾根先端部の傾斜も緩やかな地点に千光寺は位置している。そして、東西にある谷の影響で、ある程度の制限は受けても、建物を真北方向に建造できない地形ではないと考えられる。つまり、千光寺は、起伏の多い地域に立地しており、各建物の方位は地形に依存している可能性が高いものの、周囲地形と建物をみると、必ずしも地形に依存しているとは考えにくい。本堂をはじめとする建物の方位については、何らかの意味がある可能性が考えられる。

本堂など建物は、図5に矢印で示すように真北より東に数度ずれた方位にあり、コンパスで磁北を決めた可能性は考えられる。そして、その後の建物は、最初の建物の方位に倣ったということも推察される。

＜千光寺旧伽藍における地中レーダ探査の結果と方位＞

千光寺旧伽藍で行ったレーダ探査では、前章レポートの図 5 に示した様に、礎石によると考えられる反応が領域 C において多く認められた。反応の分布をみると、一定の方向性を示す並びが推測される。その並びの方向は真北から東へずれており、ずれの角度は、千光寺の建物でのずれの角度（本レポートの図 5）よりも大きい。図 6 には、考古地磁気から研究されている古い時代の偏角の変化を表しているが、参照すると 1300 年頃が大きく東にずれており、礎石の並びの方位は、この時代との対応も考えられる。

検討が更に必要ではあるが、レーダ探査で得られた反応が建物の礎石に関するものである場合、この方位と推測される年代は、千光寺旧伽藍の建物の時代についての一考察になるかも知れない。

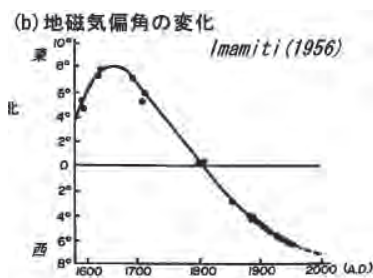


図 5. 千光寺と建物の方位 実線は真北の方向、破線は磁北の方向。

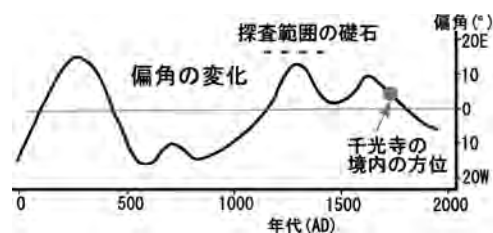


図 6. 地中レーダ探査で示唆された反応から推定される千光寺旧伽藍における礎石の並び方向と過去の地磁気の偏角 (Hirooka, 1971 より加筆) との対比。

謝辞

内容をまとめるにあたって、西井龍儀先生に関連資料とご助言を頂きました。感謝致します。

参考文献

- Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. and Mineral., 38, 167-207.
- 広岡公夫 (1976): 古寺伽藍中軸線方位と考古地磁気学, 考古学雑誌, 第 62 巻 第 1 号, 49-63.
- Imamiti, S. (1956): Mem. Kakioka Magnetic Observatory, 7, 49-55.
- 中島正志・夏原信義 (1981) 考古地磁気年代推定法, ニュースサイエンス社, pp95.
- 西和夫 (1986) 建築技術史の謎を解く, 彰国社, 250 頁.
- 西井龍儀 (1995): 芹谷山千光寺平成大調査 - 測量・考古調査部 -, 土蔵 第 8 号, 砺波郷土資料館土蔵友の会, 1-11.
- 酒井英男・松延礼佳・伊藤孝・野原大輔 (2007): 砺波市久泉遺跡の焼土遺構の考古地磁気による年代推定, 「久泉遺跡発掘調査報告Ⅲ」, 砺波市教育委員会, 215-223.
- 酒井英男・泉吉紀・菅頭明日香・栗山雅夫 (2007): 前田利長墓所および瑞龍寺の方位の研究, 高岡市教育委員会, 『高岡市前田利長墓所調査報告』, 112-116.
- 砺波市文化財保護審議会・砺波市教育委員会 (2014): 砺波市の文化財, pp146.

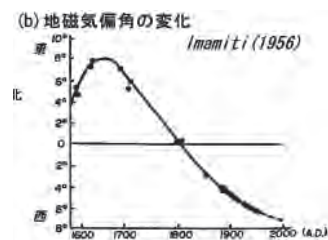


図3. 前田利長墓所（左）と瑞龍寺の伽藍（右）における方位と真北方向．

瑞龍寺は、参道（八丁道）を通り墓所の西方に位置する．利長の三十三回忌（正保三年）をきっかけに整備に着手され、墓所と同時期の構造物とみなされる．図3右の（伽藍）軸線には、真北から約5度の東偏が認められる．墓所と瑞龍寺は800m以上離れており、両方で方位設定に磁石を使った可能性がある．

慶長8年（1603年）築城の二条城（徳川家康）も、堀等の方向は真北から東に約3度ずれ、地磁気と対応している．西（1986）は、磁石で南北を決めて築城された可能性を指摘している．

以上の様に、江戸初期には、磁石を用いて方位設定が施されたと思われる建造物がある．

4. 千光寺における建造物の方位の研究



図4. 千光寺と周囲の地図

4.1. 西井龍儀の研究

西井はかつての報告（芹谷山千光寺平成大調査、土蔵 第8号、1995）で方位に関し、“現在の建物方向と異なる正方位に近い地割りや造成面があり、寺域で最も古い状況を残しているとみられる千光寺墓地の墓の配列にも同様な傾向があるように窺える”と述べている．更に、観音堂の右横から南へ麓・山道が南北方向に合い、その北側延長上に本堂があり、南側延長上に金比羅山が位置することを発見した（図4）．これは単なる図上の偶然か、意図された配置とみるか、今後の調査における問題と指摘されている．

4.2. 千光寺の各建物の方位

千光寺の建物の方位を検討した．表1に各建物の年代を示す．図5をみると、本堂などの建物は真北より東に数度ずれた方位にある．千光寺の本堂と庫裏は、火災後の1751年に建てられ、その後、各建物が順次、建立されている．1751年当時の地磁気偏角は東向きで、建物の築造にあたり磁北を利用してれば軸線は真北から東へ数度ずれることになり、建築年代と地磁気偏角が符合する．このことから、本堂や庫裡を含む現在の伽藍は、地磁気偏角が示すところ

見本

千光寺の方位の研究

富山大学理学部 酒井英男・泉 吉紀
 砺波市教育委員会 野原大輔
 国土地理院 中埜貴元

1. はじめに

複数の建物から成る古建造物、中でも平坦地の仏教寺院（古寺）では、南北方向（或いは東西方向）の軸線を意識していると思われるものも多く、地球の自転軸が地表を貫く地理的北極・南極の方向を、北及び南の方位として築造されている。

また真北から僅かにずれた方位で建てられている古建造物もある。その理由として、時代によって変化する地磁気の磁北を方位設定に利用した可能性がある。

さて、千光寺は図1の左の様に主軸線の方位は真北からずれている。また正保三年（1646年）の造営と考えられる前田利長墓所（右図）や同時代の築造とされる瑞龍寺の主軸線も真北からのずれが認められる。

本研究では、千光寺の方位について、地磁気方向との観点から検討した。



図1. 左は千光寺と周辺、右は前田利長公墓所と周辺の地図を示す。

2(a)に示すように下方を向き、水平面からの落ちの角度は伏角と称される。

図2の右は、日本近辺で過去に観測された偏角を、茨城県柿岡の偏角値に換算して示している (Imamiti, 1956). 最も古い観測は1600年頃に行われており、その後、最近までの約400年間では、系統的变化がある。つまり、1600年頃の偏角は東偏であったのが、伊能忠敬が江戸の日本橋で観測した1800年頃にはほぼ0度（真北方向）となり、その後は西偏に変化し現在に至る。

2.2. 古寺の方位の研究

古寺の築造時の方位設定に関して、広岡 (1976) は、仏教寺院の方位には南北か東西に揃うように建てられていることが多いこと、南面の伽藍を持つ古寺の中軸線は、殆どが南北方位となっているが真南北からずれるものがあることを示している。そして、7世紀頃には中国で実用化されていたと考えられる磁気コンパスが、日本の古寺の築造時の方位設定に利用された可能性を示唆している。

2. 建造物の方向と磁北との関係

2.1. 地磁気方向の変動

地球の磁場（地磁気）は、地球深部の流体である核と称される領域で発生しており、核の流体運動により変化している。地磁気を地球中心に置く磁石で近似すると、磁石の軸（南北極）は長い地質時代を通すと自転軸の方向とほぼ一致するものの、自転軸の周りを回りながら移動し続けている。これが主な原因となって磁北は真北からずれており、ずれの角度の偏角は時代と共に変化している。また、地磁気は北半球では図

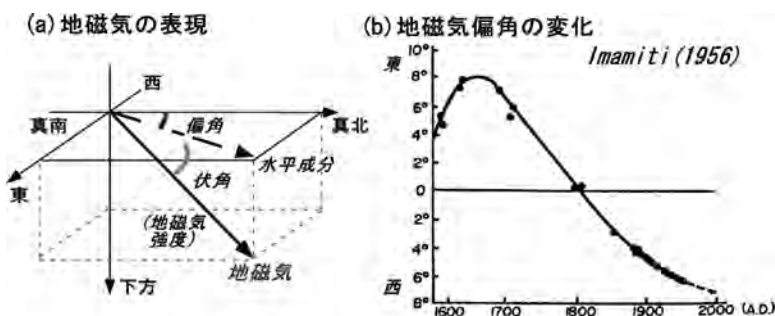


図2. 左：地磁気の方向（偏角、伏角）と強さの表現。右：日本近辺での偏角の過去400年間の変化 (Imamiti, 1956)。

3. 前田利長墓所と瑞龍寺の方位

前田利長墓所は、正保三年（1646年）に現在の基本形態が造営され、御廟を中心とする主軸は当初のものと考えられている。図3では墓所の方位が真北より東へ約5-6度ずれており、1600年代の地磁気の偏角と良く合う。周辺の状況から地形の影響は考えにくい。

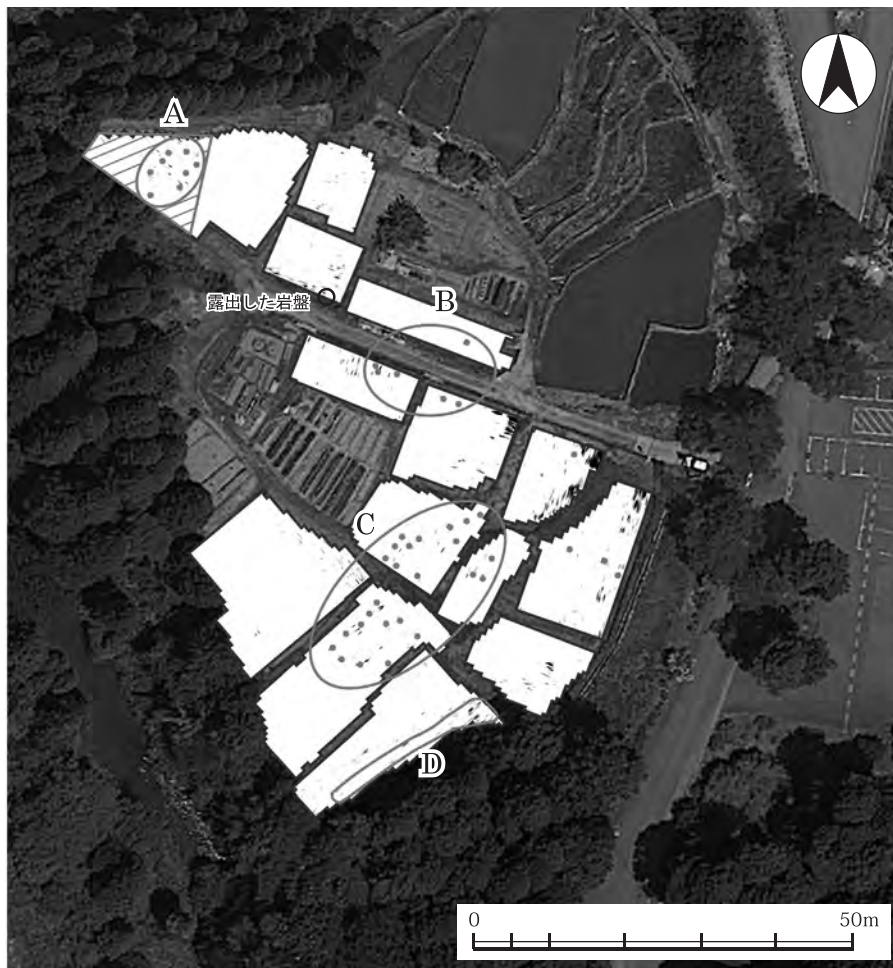


図 5. 探査結果の検討

● 石と考えられる反応

考えられる。また距離 18-60m では 250MHz で不明瞭だった地層境界が確認できたが、これは、参道造成時に段階的に盛土を施した可能性を示しており、興味を持たれる。

図 5 には、石の反射を抽出しており、黒色は反射の強い領域である。そして断面図と平面図の両方で石の応答が得られた箇所を●印で示した。図の A-D の範囲で特徴的な構造が認められた。領域 A は図 3 の強い反射領域が広がる範囲であり、石が見つかった。反

射の強い領域は、地下に空隙が多い領域（平坦面造成で整地盛土が施された可能性）や土壌が締まっている場合に現れる。遺構であれば、基壇状の高まりや道が推定される。領域 B は参道を挟んで石の応答があり、門等の構造が推定される。領域 C は多くの石が密集し、建物の中心と考えられる。領域 D は図 3 で強い反射領域の間を弱い反射領域が地割に沿う様に、直線状に繋がっている。これは溝を示す反応と考えられ、区画溝の様な構造の存在が推定される。



図 6. 参道の崩落により露出した岩盤

4. まとめ

千光寺西側の耕作地で、過去の伽藍配置を探ることを目的に地中レーダ探査を実施した。その結果、複数の礎石を示唆する異常応答が認められ、それを基に数個の建物跡が推定された。石の応答が判読できなかった箇所では、個々の水田、畑の区画毎に土壌条件（含水率等）が異なり、レーダ探査が有効でない探査区があった可能性もある。今後、測線幅を密にして測定し、また電気探査等の他の方法も併用して検討することで、より精度良い地下状況の推定が行えると考えられる。

見本

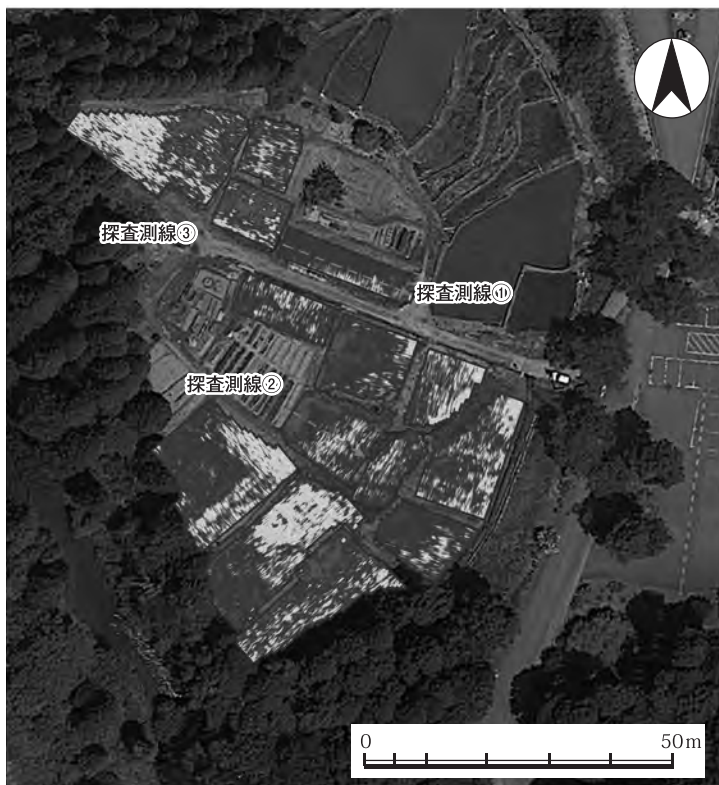


図3. 各 Grid の Timeslice 図

割に沿って GRID1-14 の 14 箇所の探査区を設定して探査を行った。測線総数は計 456 本、測線間隔は 0.5m である。探査範囲を図 2 に示す。

3. 探査結果

各探査区 (Grid1-14) における探査結果を述べる。解析はレーダ波の往復の伝搬時間と反射波強度を記録し、測定順に並べた鉛直断面図 (GPR profile) と Timeslice 図 (水平面) で行った。図 3 に GRID1-14 の Timeslice 図

を示す。各探査区の表面は、圃場整備・土地改良等で改変を受けて標高が異なる。そこで各図は、Grid 毎に解析深度を 0.3-0.9m の範囲で示した。反射の強い領域を明色、弱い領域を暗色で表したが、この強弱は、土壌等の比誘電率の変化に依存し、石 (礎石) 等では比較的強い反射となる。また堀等では堀を埋める覆土と地山の土質の違いを表し、誘電率の差異から異常が検討できる。

図 4 に代表的な鉛直断面図として、参道北側の測線①、南側の測線②、参道上の測線③における結果を示す (図 3 に測線位置を記載)。

北側測線①では、測線距離 16m、深度 0.42m に石の反射が認められた。南側測線②でも、距離 6m、深度 0.4m に石の反射があり、これらは礎石の反射と考えられる。参道上の測線③ (250MHz, 100MHz) では、測線は緩やかに傾斜していたので、レベル測量で表面高度差を測定して結果を補正した。

.250MHz では、距離 6-18m、深度 1m の範囲に反射の強い領域があり、土壌内の礫が多い領域を示していると考えられる。

また距離 18m、60m の地点で地層境界を示す応答が得られた。より深部の構造を探る為に 100MHz で同じ測線を探査した結果 距離 6-18m、深度 1.3m で地下に平坦面が認められた。探査日前の豪雨で参道北側の側面が崩落しており、距離 12-14m で岩盤が確認されていた (図 6)。探査はこの岩盤面の反射を捉えた

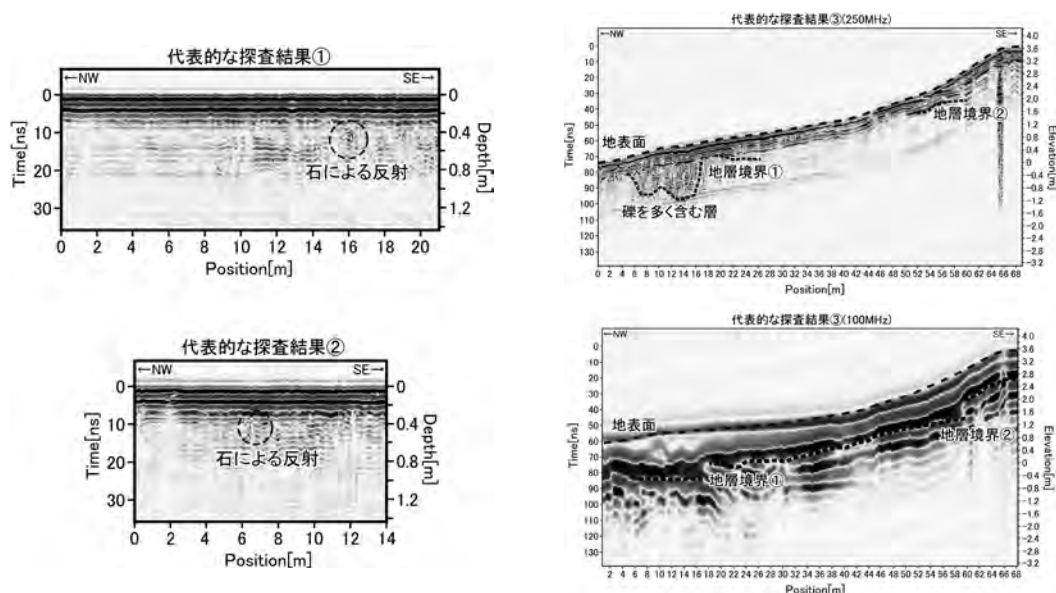


図4. 代表的な探査断面図

千光寺旧伽藍における地中レーダ探査

富山大学理学部 泉 吉紀・鈴木 碧・酒井英男
砺波市教育委員会 野原大輔

1. はじめに

富山県砺波市芹谷に所在する千光寺は、大宝3年(703年)天竺僧法道円徳上人が開いたとされ、富山県内で最古段階の寺院と伝えられる。上杉謙信による侵攻の際、堂宇を焼失しており、その後元和4年(1618年)の火事で再度被災した。火災の度に建物は再建され、寺域の様相も変化していると考えられる。我々は過去の伽藍配置を非破壊で探ることを目的として千光寺旧伽藍(芹谷下大門遺跡)の地中レーダ探査を実施した。

2. 探査概要

探査は2014年7-9月に実施した。装置は、Sensors&Software社 Noggin plus と pulse EKKO IVを用いた。レーダ探査の探査深度はアンテナ周波数に依存し、低周波では深く、高周波で浅くなるが、データの分解能は高周波に比べて低周波では粗くなる。今回の探査では、中心周波数100,250,500MHzのアンテナを用い千光寺西側の耕作地で行った(図1は探査の様子)。地形は西から東へ緩やかに上がり、表面は区画毎に地表の高さが異なっていた。そこで、区



図1. 探査実施状況(上:500MHz, 下:100MHz)

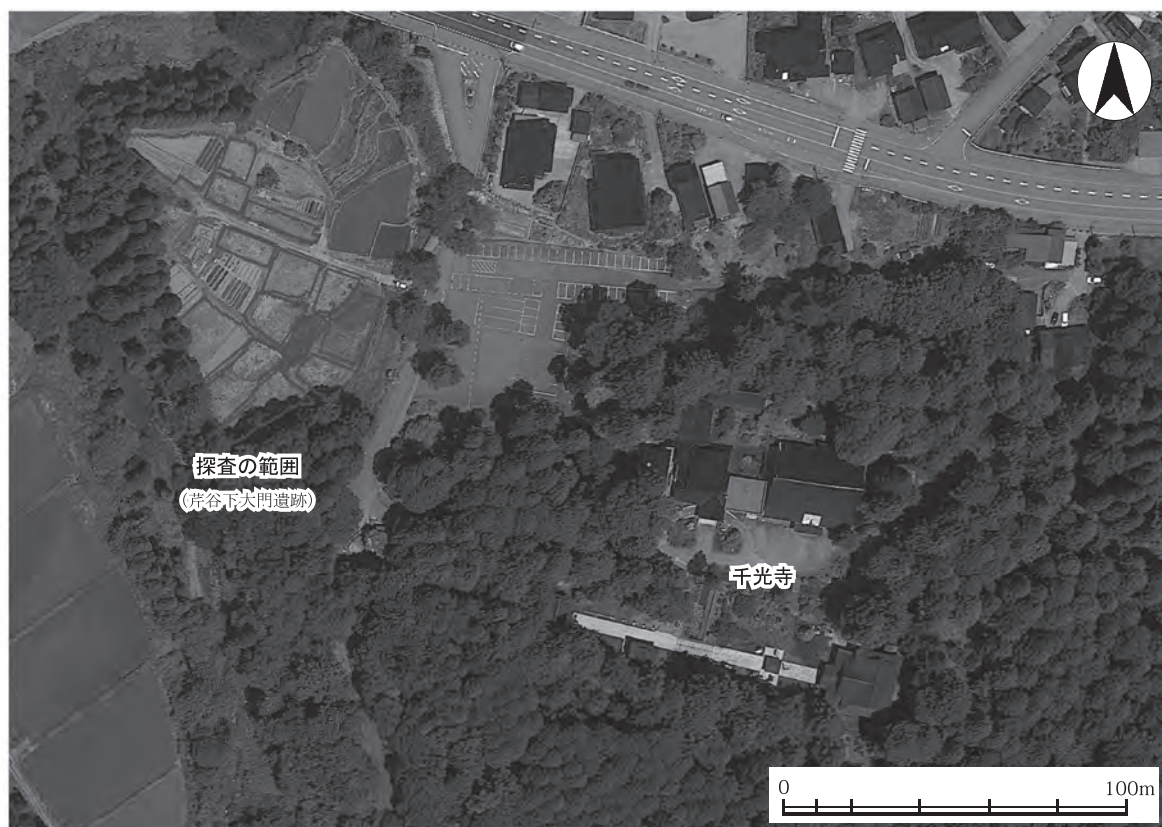


図2. 探査範囲

謝辞

本展覧会を開催するにあたり、千光寺をはじめ、貴重な法宝物をご貸与くださいました所蔵者の方々、ならびに展覧会実現のためにご協力いただきました関係諸機関および個人の方々に對し、心から御礼申し上げます。

安念道雄
安念有聲
安念余志子
石丸正運
泉 吉紀
糸数寛宏
上野幸夫
風間耕司
金子容士
川口圭太
川堰あけみ
酒井英男
晒谷和子
杉崎貴英
鈴木 碧
鈴木景二
高橋 敦
中埜貴元
鶴巻登志広

鶴巻弘文
中村晋也
名越仁功
西井龍儀
仁ヶ竹亮介
藤井建二
藤田慎一
松岡達子
森越 博
山本秀一
吉水友香

富山大学
金沢学院大学
高岡市立博物館

(五十音順、敬称略)

編集後記

恥ずかしいことだが、千光寺を意識したのは、平成九年に砺波市美術館に勤めてからである。学ばせてもらって二十年にも満たない。当時館長でいらした石丸氏のご実家であると同つてからのことだ。マイカー持ちの身としては国道三五九号線からアクセスしやすいこともあって同寺で開かれる文化財展や、初詣で参拝させてもらうなど折にふれ接し、間接的ながら身近に接する幸運に恵まれた。そして、これら密教美術は代々伝えられている先人の尽力はもちろんだが、近年同寺関係の方々によって精力的に修復がなされていることが大きい。その修復も古来の手法を尊重しながら、実に丁寧な処置が行われている。山門の仁王像を修復する院を二度訪れ、その仕事を拝見させて頂く機会も得られた。

各氏の論考にもあるように、同寺は、山門、本堂、書院などの建築においても見るべきものが多い(観音堂と本殿をつなぐ回廊は和算を使用。書院は貴重な部材が結集しており、現在では再現が困難とされる)。参道から本堂へと至るアプローチは実にすばらしい。かけがえのないものであると認識する。芹谷山千光寺に多くの方が訪れ、その美に触れて頂きたい。(Mt)

砺波郷土資料館、となみ散居村ミュージアム、砺波市美術館共同企画展
越中真言の古刹 芹谷山千光寺展
編集 千光寺展ワーキンググループ

尾田武雄 (砺波市文化財保護審議会委員)
松田憲 (NPO法人砺波土蔵の会理事)
高原徹 (砺波郷土資料館館長)
安カ川恵子 (砺波郷土資料館主任学芸員)
渡辺礼子 (砺波郷土資料館学芸員)
白江秋広 (となみ散居村ミュージアム館長)
野原大輔 (砺波市教育委員会生涯学習・スポーツ課主任)
小野田裕司 (砺波市美術館館長)
末永忠宏 (砺波市美術館学芸員)
長田里恵 (砺波市美術館学芸員)

千九三九、一三八三 富山県砺波市高道一四五番地一
電話 〇七六三・三二・一〇〇一
製作 株式会社トーザワ
発行 千光寺展実行委員会 ©二〇一四



